

詩人ゲーテのユーモア

— 1829年の或るコメントを巡って —

榊 弘市

はじめに

或る一行にみたくない短いコメントの意味と由来の考察が、この論文のテーマである。恋愛小説『若きヴェルテルの悩み』や不朽の名作『ファウスト』で知られる偉大な詩人にして作家のゲーテは、おびただしい量の格言や警句を残したことでよく知られている。詩人にして格言作家とも言われるゆえんである。ゲーテの「格言と反省」や「箴言と省察」のタイトルで知られる格言警句集は、その中のほんの一部を集成したものである。それは、洞察と知性と機智、ユーモアとイロニーで一杯である。格言や警句の各々が互いに反発し合い、矛盾対立することも稀なことではない。この知性とユーモアに富む作家は「一見奇妙に見える方法」で、読者が自分自身で考え、判断し、行動するように促しているようである。ゲーテの『箴言と省察』の中に一行にも満たない「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである」という短い言葉が収められている。ゲーテの死後、遺稿の中から発見された覚書の一つである。非常にスマートなキャッチフレーズ風のコメントが、この度の考察のテーマである。

1829年4月2日、ゲーテの79歳の時のことである。詩人ゲーテは、対話相手の若いエッカーマンに向かって、覚書との関連で「健康的なものはクラシックなものであり、病的なものはロマンティックなものである」と語る。健康と病気は対立する。健康は善きものであり、病気は悪きものである。私たち人間に病気は避けられないが、出来れば病気にはなりたくない。健康を損なうと病気になる。病気が回復すると健康になる。病気は消滅する。クラシックとロマンティックもそのような関係にある。そうゲーテは言いたいのであろうか。

ところで、この奇妙で不可解な言葉を発したのと同じ年の1829年

12月16日に、ゲーテはエッカーマンに向かって、『ファウスト』「第二部」の「第二幕」と「第三幕」の出来栄を自ら^{ことほ}寿ぐ。今度は一転して、文学の成功のために「クラシックなものとロマンティックなもの」(Klassisches wie Romantisches)、この「二つの文学形式」(beide Dichtungsformen)が際立って重要であると述べる。クラシックなものはロマンティックなものと同様、文学の世界において、無くてはならないものであると明言する。

さて、最初に紹介した不可解な遺稿中の覚書は、上に引用した二つの対話中の発言と同じ1829年のものと推定されている。1829年、ゲーテ79歳の不可解な覚書、4月と12月の対話中の互いに矛盾・対立する二つの発言。以上のゲーテの三つの言葉のうちの、『箴言と省察』に収められた「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである」という言葉が人々の注目を集めた。この簡潔で新鮮な言葉が人々の心をとらえた。その上ゲーテの格言という権威が、この奇異な言葉を人々に受け入れやすいものにした。エッカーマンの『ゲーテとの対話』は、当初権威のあるものではなかったが、4月の春の対話中の言葉は格言集の覚書を補完するものとして、人々の関心の的になった。しかし、12月の冬の「クラシックなものとロマンティックなものは共に重要なものである」という言葉は、ほとんど考慮されることがなかった。覚書と春の対話中の言葉が、その後クラシックとロマンティックや古典主義とロマン主義が話題になる際に、陰に陽に影響を与えるようになった。

「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである」という言葉によって、ゲーテはクラシックとロマンティック、さらには古典主義とロマン主義を定義することを意図していたのか、それともそのようなことは意図していなかったのかを考察する。考察の導きの糸は、予断を許さない論証的考察の道のりそのものである。

ところで、『ファウスト』を訳した柴田翔によると、ゲーテは「名のみ

高くて、読まれることの少ない作家」だそうである¹。ゲーテ（1749-1832）の82年の長い生涯は、天に召される直前まで、詩歌・戯曲・小説の創作活動と文芸評論、自然科学の研究に明け暮れる多忙な一生であった。長い人生に幕が下りる最後の最後まで充実した一生であった。上に取り上げた1829年の翌々年の1831年に、不朽の名著『ファウスト』が完成する。創作に着手してから60余年を経ての熱い願いの成就である。また同じこの年に、ゲーテは自伝『詩と真実 一わが生涯より一』、自然科学論文『地質学の問題とその解決の試み』、『植物の螺旋的傾向』、『動物哲学の原理』を出版している。まだまだ衰えることのない創作・研究意欲の旺盛な中でゲーテの問題の言葉は、その後さまざまな仕方で波紋を呼ぶ。

本題に入るに先立って、第一章でゲーテの若い頃の話をする。第二章でゲーテを取り巻くドイツの近代文学事情について触れる。第三章においてこの度の本題の論証的考察を試みる。1829年におけるゲーテの遺稿の覚書とエッカーマンに向かって語った言葉は、そのことによって、ゲーテがクラシックとロマンティックを定義することを意図したものではないこと。それは詩人ゲーテのユーモアであることを明らかにする。

使用したテキストは、現在、フランクフルト・アム・マインのドイツ古典出版社（Deutscher Klassiker Verlag）から編集・出版されているゲーテ全集フランクフルト版（FGA）である。

ゲーテの作品の引用は、潮出版社版『ゲーテ全集』（全十五巻）の訳に準拠している。例えば、(Ⓔ12頁)は潮出版社版『ゲーテ全集』第15巻12頁を表わす。また(Ⓔ12頁。FGA12-15~17)は、潮出版社版『ゲーテ全集』第15巻12頁。フランクフルト版『ゲーテ全集』12巻15~17頁を表わす。

人文書院版『ゲーテ全集』（全十二巻）を参照した。また、第一巻の『詩集』と、その丹念な「訳注」から多くを学んだ。

1 柴田翔「訳者解説」（ゲーテ『ファウスト』講談社、1999年）746頁。

翻訳本の原書名は、翻訳本の初出の際、その後に表記する。

ゲーテの作品の引用は、本文中に表記した。フランクフルト版『ゲーテ全集』第39巻所収のエッカーマンの『ゲーテとの対話』も同様に本文中に表記した。(『対話 1829年4月2日』)は、エッカーマンの『ゲーテとの対話』(山下肇訳、全三巻、岩波文庫)の1829年4月2日を指す。

尚、〔 〕は引用者の補註である。

第一章 ゲーテの歩んだ道

1. 幼年時代
2. 『ゲッツ』と『若きヴェルテルの悩み』：詩人の誕生と自覚
3. イタリアへの旅: ヴィンケルマンの古典古代の美と崇高の世界

第二章 ゲーテを取り巻くドイツ近代文学事情

1. ドイツ古典派とドイツ初期ロマン派
2. ゲーテと初期ロマン派の人々
3. ゲーテとロマン派の人々との交流の継続
4. 国民文学から世界文学への移行とロマン派文学の再評価

第三章 ゲーテの問題の覚書「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである」は、ゲーテが定義を意図したものではないことの論証的考察

1. 論証的考察 —その1—
2. 論証的考察 —その2—
3. 論証的考察 —その3—
4. 詩人ゲーテのユーモア：

「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである」を巡って

5. 結び

おわりに

第一章 ゲーテの歩んだ道

1. 幼年時代

「1749年8月28日の正午。12時を知らせる鐘の音とともに、フランクフルト・アム・マインで私はこの世に生をうけた。星位には恵まれていた」。ドイツが生んだ最大の詩人ヨハン・ヴォルフガング〔・フォン〕・ゲーテ (Johann Wolfgang (von) Goethe) は、自伝『詩と真実 ―わが生涯より一』をこのような書き出しで始める。ゲーテが生まれたフランクフルトは、中世末期からライン河沿いに位置する交易の中心地であった。神聖ローマ帝国の直轄自由都市として、伝統的に皇帝の選挙と戴冠が行なわれる都市であった。ドイツの大小300の領邦国家と同等の格と自由を享受する都市で、ゲーテは恵まれた子供時代を送った。ゲーテの父方の祖父は裁縫師として諸国を遍歴した後でフランクフルトに至り、市民権を得る。母方の祖父はフランクフルトの最高位の官職であるシュルトハイス(市統領)の地位にあった人である。ゲーテの父は法律に明るいうえ学識もあったが、名目上の帝国枢密顧問官にとどまる。定職のない身で宏壯な邸宅に老母とともに住んでいた。1748年8月、フランクフルト市長の娘、17歳のカタリーナ・エリーザベト・テクストルと結婚する。その翌年誕生したのが長子ゲーテである。下に5人の弟妹がいたが、ゲーテとすぐ下の妹コルネーリアの二人が健やかに成長した。妹コルネーリアは兄ゲーテのよき理解者であった。学問好きで教育熱心な父からは努力と根気と反復の精神を学び、楽天家の母からは生きる^{よろこ}喜び、ユーモアのセンス、空想の^{てんぶ}天賦の才^うを享けついだ²。

16歳の9月、父の期待を一身に受けて父と同じライプツィヒ大学の法学部に入学する。小パリといわれた啓蒙の街ライプツィヒで3年間学んだが、病を得て故郷に戻る。一度目の挫折である。周りの献身的な看病もあって、病も癒え、残りの単位を取得するためシュトラースブルグ大学の法学部に

2 高橋義孝「解説」(『若きウェルテルの悩み』新潮文庫、2014年) 219頁参照。

入る。当時フランス領であったシュトラースブルグでフランスを知り、さらにはヘルダーとの運命的な出会いを経験する。博士号の取得に失敗する。二度目の挫折である。故郷に帰り弁護士を開業したゲーテは、その傍ら『ゲッツ』と『若きヴェルテルの悩み』を執筆し、発表する。ドイツのみならず世界的な若き天才文学者の誕生である。ゲーテ25歳の秋である。

ゲーテの人生は生涯にわたって愛とロマンスとに彩られていた。ゲーテの初恋は14歳の時のいわゆるグレートヘンとの、特に早熟とも思われえない恋である。(『神曲』(Divina Commedia; 神聖喜劇)で有名なダンテがベアトリーチェを見初めるのは9歳の時であった(岩倉具忠『ダンテ研究』創文社、1988年、434頁)。フランクフルト時代の恋は、美しい抒情詩『リリーに』(1775-6年)で歌われた女性リリーとの恋で終わる。83年の長い生涯のうちで、ゲーテの最も晴やかな時のつかの間の恋であった。

ヴァイマルの宮廷入りをして間もなく、ゲーテはシャルロッテ・フォン・シュタイン夫人を知る。夫人は、ゲーテより7歳年上ですでに7人の子の母であった。シュタイン夫人に対するゲーテの熱情は12年間にわたって燃え続けた。ドイツ文学者高橋義孝はゲーテにとって夫人は「姉妹であり恋人であり助言者であり友人であった」と記す。高橋は、このゲーテの「不思議な恋」を「前期ヴァイマル時代の最も重要な事件」に位置付ける³。ゲーテのロマンスは、73歳までの恋と愛の遍歴において、長い短い、濃い淡いを含めて様々な色彩を現出する。

2. 『ゲッツ』と『若きヴェルテルの悩み』： 詩人の誕生と自覚

『ヴェルテル』出版の1ヶ月後、ゲーテは故郷のフランクフルトでドイツ近代詩の父と言われるクロップシュトックの訪問を受ける。ゲーテは『ゲッツ』と『若きヴェルテルの悩み』によって、文学界に華々しくデビューした。そのゲーテに文化芸立国のヴァイマル公国が重大な関心を示す。

3 高橋義孝、前掲書225～6頁。

まだアンナ・アマリア太公女の治世の時である。彼女は、プロイセンのフリードリヒ大王（1712年-1786年）の姪にあたり、1758年に未亡人となつてから1775年に政務を長子カール・アウグスト（1757-1828年）に譲って引退するまで、摂政として国益を守り、またヴァイマルの伝統にならって学問と芸術を奨励した。ヴァイマルは小さいながらも既にこの頃から、英明な君主のいる世界への文化学芸の窓が大きく開かれていた都として知られている。バロック音楽の巨匠バッハは当時人口5千人⁴の小さな貧しい町ながら、教養高い君侯の治めるヴァイマルの宮廷礼拝堂オルガニストとして招かれ、1708年23歳から9年間のヴァイマル時代に、後の大音楽家としての足場を固めている。

ヴァイマル公国宮廷のゲートへの関心は異例のものであった。猛烈なアタックである。1774年9月『若きヴェルテルの悩み』出版、同年12月11日、パリに向かうザクセン・ヴァイマル公国の二人の公子、カール・アウグスト公子（1757年-1828年）とコンスタンティン公子（1758年-1793年）と、一行に随行の（太公女の）侍従カール・ルードヴィヒ・フォン・クネーベル（1744年-1834年）が共にフランクフルトのゲートを訪ねる。

1775年5月、貴族の三人の子弟に誘われてのスイス旅行の往路、ゲートはカールスルーエのバーデン辺境伯カール・フリードリヒのもとでヴァイマル公子カール・アウグストとその婚約者ヘッセン・ダルムシュタット公女ルイーゼ（1757年-1830年）に謁見の機会を与えられる。同年9月、カール・アウグスト公子は18歳でザクセン・ヴァイマル・アイゼナハ公国の統治者となる。いまや、ヴァイマルの太公となったカール・アウグストが婚約者のヘッセ・ダルムシュタット公ルイーゼ（1757-1830）とのカールスルーエでの婚礼（10月3日）のための往路と復路の途中2度にわたってフランクフルトのゲートを訪ね、ゲートをヴァイマルに招待する。1775年26歳の

4 小塩節〔文〕菅井日人〔写真〕『ヨーロッパ音楽家紀行 天と地のひびき』日本キリスト教団出版局、2002年、10頁。

ゲーテは11月招きに応じてヴァイマルに向かう。以来そのままヴァイマルの住人となる。

ヴァイマルは人口十萬のザクセン・ヴァイマル公国の首都で、人口わずか6千人の小さな町であった。その後のゲーテは、ゲーテより8歳年下のカール・アウグスト太公とその母アンナ・アマリア太公女の存在を抜きにしては語るができない。

ところでゲーテは1824年1月2日のエッカーマンとの対話で、ことのほか『ヴェルテル』に就いて雄弁に語る。「偉大なもの」は、「あの邪魔の入らない、天真爛漫な、夢遊病者のような本能的な創作 (jenes ungestörte, unschuldige, nachtwandlerische Schaffen) からのみ産み出されるものである」というようなことをエッカーマンに語り、しばらくして、「話題は一転して『ヴェルテル』に移った」。「あの本は出版以来たった一回しか読み返していないよ。そうしてもう二度と読んだりしないように用心している。あれは、まったく業火そのものだ！ 近づくのが気味悪いね。私は、あれを産み出した病的な状態の感情に再び完全におそわれそうで恐ろしいのさ」。「自分自身の青年時代の憂鬱 (Trübsinn)」とゲーテは述べる。「私を『ヴェルテル』が生れたあの心理状態へひっぱりこんだ」自分自身の青年時代の憂鬱 (症) の中で、「私は生きた、愛した、ひどく悩んだ！——それがあの小説だ」。人は「誰でも生涯に一度は」自分自身の『ヴェルテル』の時代を体験するとゲーテは述べる。さらに4年後には、「私は、恋愛詩や『ヴェルテル』を二度とは作らなかった。非凡なものを生み出すあの天啓 (göttliche Erleuchtung) は、つねに青春や創造力と結びついているのだ」と述べる (『対話 1828年3月11日』)。

詩人のこれらの言葉の意味することを語ることは不可能である。しかし諸々のことも含めて言えることが二つある。一つは「ヴェルテル時代」にゲーテが自己の内なる才能を明確に自覚したこと。もう一つは自分の中にある容易に書き尽くすことの出来ない多くのテーマとその重要性を痛感したことである。

ゲーテの時代のドイツは、まだまだ作家の生活基盤が脆弱であった。ゲーテの先輩のレッシングの時代はもとより後輩の初期ロマン派のティークの時代になってもそうだった⁵。シラー (1759-1805) の早世もそこにあるとゲーテは語っている (『対話 1827年1月18日』)。ゲーテの自分自身の才能に対する自覚は、安定した経済基盤を得ての継続的な創作活動を切望させる。市民階級社会とは異なるより洗練された創作活動の場をゲーテが求めたことは十分に考えられる。そしてそのような環境の中で創作活動を行った詩人が、あのクロプシュトックである。彼は1750年にデンマーク王フレデリク5世に招聘されて、コペンハーゲンで安定した環境の中で創作活動と後進の育成にあたっていた。20年程の歳月の中で宮廷社会のありように通じていた⁶。あの、と言ったのは、第一に近代ドイツ詩の父にして、ゲーテを世に送った詩人という意味である。『若きヴェルテルの悩み』の「奇蹟的な時」を演出したクロプシュトックである。背景にクロプシュトックの頌歌「春の祝祭」を彷彿させるあの「宿命的なパーティー」のシーン (『若きヴェルテルの悩み』6巻96頁) のない『ヴェルテル』を私たちは想像することが出来ない。『ヴェルテル』の出版は1774年9月である。10月初旬に、ドイツ文壇において最大の尊敬を集めていた支配者クロプシュトック⁷が旅の途中、フランクフルトのゲーテのところに立ち寄り、ゲーテが彼をダルムシュタットまで送った。

5 レッシングが20歳の頃は、ドイツはまだ三十年戦争の戦禍から立ち直れずにいた。ティークの時代に関しては、リュティガー・ザフランスキー著、津山拓也訳『ロマン主義 あるドイツ的な事件』法政大学出版局、2010年、105頁参照。

Rüdiger Safranski, *Romantik Eine deutsche Affäre*. Carl Hauser Verlag, München 2007.

6 クロプシュトックは自分の庇護者ベルンシュトルフ伯が急逝したので、20年間住み慣れたコペンハーゲンを1770年に引き払って、ハンブルクの縁者のもとに住んでいたところを、パーデン辺境伯カール・フリードリヒに招聘された。クロプシュトックは1774年夏カールスルーエへ移り宮中顧問官に就任したが、同地に長くは住まず、その後はハンブルクにとどまった (⑩332頁)。

7 アルベルト・ビルショフスキ著、高橋義孝・佐藤正樹訳『ゲーテ その生涯と作品』岩波書店、1996年、240頁。Albert Bielschowsky, *Goethe. Sein Leben und seine Werke*. Neubearbeitet von Walther Linden. 2 Bände. München 1928 (1895/1903). 尚、1928 (1895/1903) は、使用版1928年 (第一巻1895/第二巻1903年) を表わす。

いずれにしてもゲーテはその後間もなく宮廷入りをする。

クロプシュトックがゲーテに会いに行ったのには二つの理由があるように思われる。一つは『ヴェルテルの』の中に自分の名前が出てくる程クロプシュトックの作品を学び模倣していたことである。しかし、このことだけでは人は人に会いに行かない。ゲーテがレッシングを深く理解していたことが、もう一つの理由である。ゲーテ自らが「業火」と呼ぶ『ヴェルテル』の最終場面、「ワインはグラスに一杯しか飲んでいなかった。机には『エミーリア・ガロッチィ』が開いたまま載っていた」、あの場面である。机上のレッシングの悲劇『エミーリア・ガロッチィ』はゲーテのレッシングに対する敬愛と彼から受けた恩恵に対する象徴である。「象徴とは事物である。事物でなくして、しかも事物である。それは精神の鏡に収斂された形象であり、しかも対象と同一である」（『象徴法』⑬193頁）ということである。

レッシングはドイツの演劇から王朝をパトロンにしての宮廷を中心に形成されたフランス古典主義の影響を払拭し、ドイツの国民的古典文学の誕生を方向付けた⁸。ゲーテはレッシングの詩論と演劇論を充分に咀嚼し、その力で『ヴェルテル』を入念にして繊細に仕上げていったことをクロプシュトックは読み取る⁹。いずれにしても、彼は若き詩人のうちに

8 このことを目的に書かれたのが、『ハンブルク演劇論』である。レッシング著、奥住綱男訳『ハンブルク演劇論』（上・下）現代思潮社、1974（1972）年、Gotthold Ephraim Lessing *Hamburgische Dramaturgie*, Lessings Werke, Herausgegeben von Kurt Wölfel, Bd.2, Insel Verlag, Frankfurt 1967.

9 レッシング（G.E.Lessing, 1729-1781）は名著『ハンブルク演劇論』を著し、その中でアリストテレスの『詩学』を援用して、フランス古典劇論を痛烈に批判し、これをドイツ劇文学の世界から放逐することに全力傾注する。この演劇論は、第1号で『エルサレム解放』で有名なイタリアの作家タッソー（1544-1595）を次の第2号でコルネーユを名指して批判する。ヴォルテールに対する批判も激しいものである。

第1号（1767年5月1日）から第104号（1768年4月19日）まで、フランス古典劇を完膚無きまでに論破する。ゲーテはギリシア三大詩人の最後の一人のエウリピデス（Euripides、前485年頃—前406年頃）の偉大さとその『タウロイのイピゲネイア』の価値をレッシングから学ぶ（第49号）。ゲーテがエッカーマンに語るレッシングは、常に最上級の讃辞に満ちている。18歳のゲーテにとって、レッシングの喜劇『ミンナ・フォン・バルンヘルム』（1767年）は「あの暗黒の時代に出現したときのわれわれ青年にあたえた影響を考えてみたまえ。まったく燦爛たる流星だった」（『ゲーテとの対話』1831年3月27日）。

無限の可能性を確信した。

ゲーテは『ヴェルテル』を「4週間のうちに書き上げた」、しかも「夢遊病者のようにほとんど無意識のままに書き上げた」（『詩と真実 第三部』⑩140-141頁）。それは自分の青春を書き残したいという強い衝動と、詩人としてデビューしたいという意欲から発していた。当時世間を驚かせた事件、イェルーザレムという優れた神学者の裕福な家庭の息子の自殺事件によって、長年あたためていた作品の構想が一気に出来上がった。その様子を、ゲーテは自然科学者のタッチで明解に記す。「ちょうど氷点に達している容器の中の水が、ほんのわずかな振動によってただちに固い氷に変わるのと同じだった」と（『詩と真実 第三部』⑩138-139頁）。しかし、作品の完成までに、更に1年半近くの歳月を要した。書き上がったのは、1774年の2月から3月にかけてのことであった。だから、ゲーテは「あれほど長いあいだ熟考を重ね、あれほどさまざまな要素に詩的統一をあたえようと努めた私の小品」と、『ヴェルテル』を愛しむように語るのである（『詩と真実 第三部』⑩145頁）。しかし、「戯曲化」という仲間言葉でつながり切磋琢磨したシュトルム・ウント・ドラング¹⁰の仲間すらが、ゲーテの『ヴェルテル』を理解することが出来なかった。ゲーテは人々の誤解に取り囲まれた。それから間もなく、『ヴェルテル』が引き金となって起こったと言われることになる、ヨーロッパ中の平和な家庭を震撼する事件

10 シュトルム・ウント・ドラング運動は、「啓蒙主義の理性優位の思考に反発し、想像力や感情ないし感受性を新たな詩作原理とした、市民階級出身の青年文士たちの革新的な心情解放運動（1760年代末～80年代前半）」である（ベンヤミン『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』ちくま学芸文庫、訳者浅井健二郎、訳注、101頁）。文学的には、ドイツの宮廷文化を支配する「フランス古典主義の詩学」の形成を「模倣のための永遠の模範」とするドイツのゴットシェート（1700-1766年）を代表とする文芸理論に対抗するドイツ民族の心情の尊重を主張する新たな思潮である。（ベンヤミン、同上書100～101頁）ドイツの民衆は、自分たちの生活感情を表現する文学を求めていた。ドイツ人自らが「遅れて来た国民」というドイツの文化事情は、フランスの古典主義を墨守する杓子定規なものであった。ドイツのシュトルム・ウント・ドラングの運動はドイツの若者の心情の表現であった。

にゲーテは巻き込まれる。世に言う「ヴェルテル現象」¹¹である。

そのような時ゲーテの前に、「自分を聖別された人間であると見なす十全な権利をえた」クロプシュトックが現れたのである（『詩と真実 第二部』⑨354頁）。クロプシュトックは、ゲーテが『ヴェルテル』に込めた一部始終を当のゲーテ以上に理解していた。1831年10月に完成した『詩と真実』「第四部」「第十八章」に、「クロプシュトックとの数度にわたる特別な会談」とある（『詩と真実 第四部』⑩270頁）。いずれにしてもその後まもなく、ゲーテはヴァイマルの宮廷に向かう。「クロプシュトックのコペンハーゲンにおける長い滞在はゲーテのヴァイマル招聘の前奏曲であった」¹²。

「私にとってヴァイマルに行くことほど、願わしいことはなかった」と、後年ゲーテは記すのである（『詩と真実 第四部』⑩316頁）。ゲーテにとって仮寓の地であったであろうヴァイマルは、ゲーテの終生の地となる。故郷のフランクフルトを去るにあたって「おれは絶対に自由な世界へと逃げ

11 ゲーテは『若きヴェルテルの悩み』によって、弱冠25歳にして世界の文学者の仲間入りを果たした。しかし、『ヴェルテル』の主人公の失恋による自殺を模倣した若者の自殺という社会現象が流行した。これが世に言う「ヴェルテル現象」である。このことでゲーテは、時代の悪戯ともいえるある種の社会現象の元凶とされ、ヨーロッパ中の非難的になる。それは若いゲーテにとって、思いもよらない降って湧いたような災難あり、大きなダメージであった。しかしゲーテは耐え抜くのである。憂鬱症的傾向と詩人に特有の心の憂鬱に苦しみながらも、ゲーテは険しい20代を生き抜くのである。このことはゲーテがほぼ49年後に著述した自伝『詩と真実』（第13章「生への嫌悪」）からも、明らかである。尚、『ゲーテとの対話』（1829年4月3日）と『ゲーテとの対話』（1830年3月17日〔19日〕）を併せて参照されたい。猪木武徳『自由の思想史 市場とデモクラシーは擁護できるか』「第3章 古代ローマ人の自由と自死」「第8節 スミスは『ヴェルテル効果』を知っていたか」（新潮選書、2016年）98-101頁参照。

12 ウォルター・ムシュク著、洲崎恵三訳「ドイツ古典主義—悲劇的視座から」（1952年）（H・O・ブルガー編者、相良守峯監修『ドイツ古典主義研究』エンヨー、1979年所収、255頁。BEGRIFFSBESTIMMUNG DER KLASSIK UND DES KLASSISCHEN（Herausgegeben von HEINZ OTTO BURGER,1972,WEGE DER FORSCHUNG, BAND CCX）

てみせる」¹³ と叫んだゲーテにとって、ヴァイマルの宮廷はそれほどに自由な世界だったのであろうか。

宮廷での最も重要な業務は、18歳の青年太公が有為の君主に成長するのを見守る重責であった。後年ゲーテは当時を回顧して次のように述べている。「若き日の太公」は「20歳代で、憂鬱な狂躁に駆られていた」、「太公はまもなく、このシュトルム・ウント・ドラングの時期から抜け出して、世のためになる明君になられた」（『対話 1828年10月23日』）。

しかし、『ゲッツ』と『ヴェルテル』における最初の二つの途方もない成功のあとで宮廷に地歩を得たゲーテは世間から置き去りにされる。『ゲッツ』は「戯曲の分野における痛烈なまでに国民的な成功であり」、『ヴェルテル』は「叙事詩の分野における病的なまでに浮華な成功」、この「いままでのあのよう騒がしい成功のあらしに包まれていた作家がふいに忘れられ、文学的死を迎えるという、この現象は、まことに稀有な^{けう}ことです」と、トーマス・マンは「作家としてのゲーテの経歴」の講演で述べている¹⁴。ゲーテは、期待に反してヴァイマルの国務に就いてからの壮年の10年を、彼の言葉でいえば「厳粛な事柄のために犠牲にした」のである。しかし、この沈黙の10年こそがゲーテのその後の作家生活の地歩を確立した10年であったことを、最もよく知るのもゲーテ自身であった。

3. イタリアへの旅: ヴィンケルマンの古典古代の美と崇高の世界

ゲーテは市民階級の上流社会の子弟に生まれ、何不自由なく育った。彼は自由闊達な町場の市民生活を謳歌して育った。また宮廷入りの七年後には貴族に列せられる。しかし何といても彼は、穏やかな自意識を財産として受け継ぐ貴族の出ではなかった（『ヴィルヘルム・マイスターの修業

13 アルベルト・ビルショフスキ、前掲書、253頁。

14 トーマス・マン「作家としてのゲーテの経歴」（1932年）『トーマス・マン全集 ⑨』谷友幸訳、新潮社、1971年、269頁と273-274頁参照。

時代 第5巻第3章』¹⁵。環境の激変と公務の多忙の中で、いつの間にか自己の詩人の感情が枯渇するのを痛感する。生来の詩人ゲーテはこの詩人の感情の枯渇におびえ、詩人ゲーテの死を予感する。イタリアへの憧れにすがってヴァイマルを逃亡した。向かう先はイタリアでなければならなかった（『滞仏陣中記』（②215-6頁）¹⁶）。天上的なものと地上的なものの間を行きかう茫洋な憧憬から鮮明な憧憬への旅立ちであった。詩人ゲーテの心を占めていたのは、ヴィンケルマンの古典古代美そのものだった。

ゲーテは両手にヴィンケルマンを持って、地中海のぬけるような青い空の下を歩く。一方の手にドイツ語の原典をもう一方の手にイタリア語の翻訳本を持って。ヴィンケルマンの目を通して、古典の美と崇高を実感する。

しかし、そればかりではなかった。ゲーテは、教えられたままに作品を単に鑑賞するのではない。自分自身も絵を画き、「目の人」ともいわれるゲーテは、詩人の鋭敏な感覚で、作品の中に、画家の人柄、制作意欲、制作技法、それらを今、現在のこのように生き生きと体験するのである。ゲーテの文学の創作理論は、古典的な絵画の鑑賞を通して、いよいよ鮮明で明確なものになって行くのである。

^{エミレット}
隠者派の教会では、ぼくが驚嘆している近古の画家の一人、マンテーニャ（1431-1506年）の絵を見た。これらの絵の中には、何という明快な、確実な、現在 eine scharfe, sichere Gegenwart が存していることであろう。この全く真実な、つまりたとえば、みせかけだけの効果をねらったものでなく、単に空想だけ訴えるようなものでなく、む

15 「シラーからゲーテに宛てた書簡 1796年7月5日」。（森淑仁・田中亮平・平山令二・伊藤貴雄訳『ゲーテ＝シラー 往復書簡集』（全2巻）潮出版社、2016年）。

16 1792年、ゲーテ43歳の時のフランスとの交戦と惨敗、そして必死の敗走行軍の中でこのことを書き記した、『滞仏陣中記』はゲーテが1820年（71歳）に『滞仏陣中記』の筆を起し、1822年（73歳）に完成した。

しろ朴訥な、純粹な、明るい、克明な、良心的な、繊細な、輪郭のはっきりした現在 Gegenwart、そこには同時に何となく厳格なもの、勤勉なもの、骨の折れるものがあるのだが、ここから、あとに続く画家たちが輩出したのであった(『イタリア紀行 1786年9月27日』④50頁。FGA15/1—67)。

E・シュタイガーは、この短い文章の中に、ゲーテの基本語の一つである「現在」という言葉が二度出現することに注目する¹⁷。

ゲーテはヴィンケルマンによってイタリアに憧れ、ヴィンケルマンと共にイタリアを歩く。それは又、ゲーテが自己の内なる市民貴族的甘えと偏見の低劣さを自覚する1年9ヶ月でもあった。人間の品格が生まれや育ちでは決まらないことをゲーテは痛感する。ゲーテは当時のドイツ社会の最下層に生まれ正規の教育も受けていないヴィンケルマンの誠実で偉大な業績に圧倒される¹⁸。

17 『イタリア紀行 1786年9月27日』④50頁。これは、通例に従い潮出版社版『ゲーテ全集』の11巻50頁を意味する。しかし引用は、ゲーテの基本語の「現在」の二度の使用に注目するシュタイガーの研究に配慮した、E・シュタイガー『ゲーテ 中』(28頁)の三木正之訳を採用させて頂く。それは翻訳文の氣息を尊重してのことである。

18 ゲーテの芸術論「ヴィンケルマン」はゲーテの「古典主義の宣言書」とも言われる(芦津丈夫「解説」(「芸術論」)③443頁)。この論文は、ヴィンケルマン(1717-68)に対する尊敬と愛情とに溢れている。「非凡な人物の追憶は、すぐれた芸術作品を前にしたときと同じよう」であると始まり、「貧賤な幼年期、少年時代の乏しい教育、青年期におけるとぎれがちな断片的な勉学、教職の重荷、こうした人生行路につきものの不安や辛苦を、彼は他の多くの人たちと同様に耐え忍ばねばならなかった。彼は30歳になっても、いまだ運命からならぬ寵愛も受けていない。」(「ヴィンケルマン」③158頁)

そしてゲーテは、ヴィンケルマンにおこったあらゆることを受け入れ芸術論、「ヴィンケルマン」を次のように結ぶ。「彼は壮者として生き、完全な壮者としてこの世を去ったのである。いまや彼は、後世の人々の追憶のなかで、永遠にたくましく強壯な人物として映じるという特典を享受している。」(「ヴィンケルマン」③184頁)ビルショフスキは『ゲーテ その生涯と作品』において、『ヴィンケルマンとその世紀』に収められたゲーテの論文「ヴィンケルマン」は、「ゲーテが精神史の領域においても偉大な模範的な表現者であることを示している」、と述べる。

生まれかわってドイツに戻ったゲーテの前に現われたのが自然児のクリスティアーネである。ゲーテは恋に陥り、愛し結婚する。頭に女工帽を戴いた乙女は23歳、ゲーテは39歳の7月のことだった。ゲーテの語るクリスティアーネは、「独立心の旺盛な他人に縛られることの嫌いな独立不羈^{ふき}の、ナイーブな、執着心のない、孤独な、社会的な拘束も、義務の束縛もうけない自然児だった¹⁹」。

第二章 ゲーテを取り巻く近代ドイツの文学事情

1. ドイツ古典派とドイツ初期ロマン派
2. ゲーテと初期ロマン派の人々
3. ゲーテとロマン派の人々との交流の継続
4. 国民文学から世界文学への移行とロマン派文学の再評価

1. ドイツ古典派とドイツ初期ロマン派

一般にドイツ文学の古典期はレッシングからゲーテまでを言う。ドイツは、ヨーロッパにおける三十年戦争（1618年-1648年）の主戦場という未曾有^みの災禍^{ぞう}にみまわれ、国土は荒廃し人口は激減し、国は大小300以上の領邦に分割され、ドイツはその後長く停滞することを余儀無くされた。このような中でドイツの王侯貴族は、強力な中央集権国家のフランスの啓蒙思想と古典主義を取り入れたのである。さらには、このフランスの啓蒙思想と古典主義が国民の教育の促進と文化芸の振興のための模範として積極的に取り入れられた。

18世紀の中葉になると、悲惨な三十年戦争の傷痕がまだ残る中にありながら、ドイツ国民は徐々に民族の自負と誇りを取り戻してゆく。最初^{のろし}に烽火^{のろし}をあげたのが劇作家で批評家のレッシング（1728年-1781年）である。

19 エルンスト・ヴィンセント著、桑嶋健一訳『情熱と分別 ゲーテの生涯を飾る女性群』泰尚社、1946年、57頁。

彼は理論と創作によりドイツ近代文学の基礎を築く。彼は『ハンプルク演劇論』で、アリストテレスの『詩学』の徹底した読み込みに基づいて、フランスの古典主義的演劇論の基礎理論である「三一一致の法則」の理論的稚拙さ²⁰を痛烈に批判し、ドイツからの排斥を唱導する。喜劇『ミンナ＝フォン＝バルンヘルム』(1767年)は僧侶を嘲笑し、悲劇『エミーリア＝ガロッティ』(1772年)は貴族の横暴を厳しく批判する(『対話 1827年2月7日』)。レッシングの眼差しは、常に同朋のドイツ国民に向けられていた。

続いてヘルダー(1744年-1803年)は、論文「シェークスピア」(1773年)でドイツの「国民的先入見、伝承、好みなどに従って、自己の戯曲を工夫する」ことを提唱する。ヘルダーの思想は、彼の一生の師である「北方の博士」ハーマン(1730-88)の敬虔主義的世界観・芸術観、スピノザの汎神論的宇宙観、更には森の民ドイツ民族の森の精霊(ガイスト)への郷愁、このような多様な要素によって形成されている。ヘルダーはこのような考えを基に、ドイツ国民が自己の芸術、文化を創造すべきだと唱導した。これらが近代ドイツ文学のその後を決定する疾風怒濤シュトルム・ウント・ドラングの運動に火をつける。

このような時代状況の中で、イギリスやフランスの感傷主義小説と書簡体小説の世界文学の潮流がドイツに入って来る。そしてこれらが一つになったものが、ドイツに固有の文学運動シュトルム・ウント・ドラング運動である。天才ヘルダーによって21歳の時のほぼ半年間にわたって徹底的に教育され、自我に目覚めたのが後の文豪のゲーテである。ゲーテはシュトルム・ウント・ドラング運動の時代の中で、世界文学史的デビュー作『若

20 三一一致の法則は、フランス古典戯曲の原則である。「時の一致」「場所の一致」「筋の一致」の法則、つまり時間は一日以内、場所は一カ所で、一人の主人公の行為(一つの筋)しか扱ってはならないという規則である。悲劇の主人公は、神話、伝説、歴史上の偉大な人物であり、テーマは特殊なことではなく一般的なもの、表現は明快、簡潔を重んじ、誇張を避け、自然であることが求められた。当時、政治的・経済的・文明的な繁栄を誇ったフランスの文学や戯曲の思潮が隣国ドイツに移入された。ゲーテは『箴言と省察』(13344頁)で、レッシングの考えに沿ったかたちで「三一一致の法則」を諷刺している。

きヴェルテルの悩み』を書き上げる。1774年、ゲーテ25歳の時のことである。

それから20年後の1794年のことである。詩人ゲーテは、理想主義者でカント学者のシラーと出会う。ゲーテ45歳、シラー 35歳である。この二人によって完成したのが、ドイツの初めての教養小説である『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』全8巻である。イギリスにはシェークスピアとミルトン、フランスにはコルネイユ、モリエール、ラシーヌが、時代を少し遡るとイタリアには『神曲』のダンテと『ラウラ』のペトラルカ、『デカメロン』のボッカチオがいる。しかし、ドイツにはこのような世界的な文豪がいなかった。ドイツ国民は、自分達の自負にかけてこのような世界的文学者の誕生を待ち望んだ。その期待に応えたのが、教養小説『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』である。『修行時代』は単なる教養小説にとどまらず、国民小説として人々に受け入れられた。ドイツの古典的国民文学者ゲーテの誕生である。

レッシングに始まる古代ギリシアの哲学者アリストテレスの『詩学』の受容、ヘルダーの多面的思想、カントの啓蒙主義、シラーの理想主義、詩人ゲーテの才能が一つになって、ドイツに固有の典型的な記念碑的作品の誕生をみた。これがドイツの古典主義である。フランス古典主義は、ルイ13世とルイ14世という絶対権力者をパトロンに得て、宮廷社会の社交と文化の要請に応えるかたちで形成された。それに対して、ドイツ古典主義文学は有力なパトロンのない中で、個々の国民の才能と情熱と努力によって誕生した国民文学であることにその特徴がある。

この頃、時期を同じくして誕生したのが、ドイツ・ロマン派である。世界文学史的には、ドイツに誕生したロマン主義が隣国フランスの停滞した文学活動を再生させる。年代順にはフランスの古典主義、ほとんど時期の重なるドイツの古典主義とロマン主義、フランスのロマン主義の順になる。それぞれの国にそれぞれの古典主義とロマン主義がある。ちなみに、古典主義と言う文学的文化的用語も、ドイツに生まれたロマン主義と言う文学的用語に対抗するかたちで誕生する。

話をゲーテに戻したい。76歳のゲーテはまだ会って間もない33歳のエッカーマンに向かって次のように語る（『対話 1825年5月12日?』）。「独創性ということがよくいわれるが、それは何を意味しているのだろう！……一体われわれ自身のものとよぶことができるようなものが、エネルギーと力と意欲のほかにあるだろうか!」。このようなゲーテの言葉には、敬虔な宗教的心情が語られているとともに、ゲーテの創作活動の秘密が吐露されている。ゲーテは、デビュー作品の『若きヴェルテルの悩み』のはじめから、その驚異的な多読と受容と咀嚼そしゃくの努力、他に類を見ることのない忍耐の継続によって数多くの作品を創作してきたということである。

『エグモント』を構想してから完成するまでに12年を、『イフィゲーニエ』は8年を、『タッソー』は9年を要した。『修行時代』の仕事は16年以上にわたり、『ファウスト』のそれは60年を超えているのである。

ゲーテは更に次の様にも語っている。レッシングやヴィンケルマンからは青年時代に、カントからは老年時代に影響を受けた。自分が「世の中に倦怠感を覚えはじめの頃」、若くて活気のあるシラーの出現、そしてフンボルト兄弟やロマン派のリーダーのシュレーゲル兄弟の「目の前でデビュー」を見た。よい時にそれぞれ「偉大な先輩や同時代人に恩恵を蒙っている」と感慨深く語る。

ゲーテとロマン派の関係を語る上で、ゲーテのこの言葉は極めて重要である。国民的作家ゲーテは、若き初期ロマン派のグループの感性と知性の力によって呼び覚まされるようにして、世界文学への道を歩んで行くのである。

2. ゲーテと初期ロマン派の人々

シュトルム・ウント・ドラング、ヴァイマル古典主義、そしてロマン派の誕生へと続く宗教的文化的エネルギーは、世界文学がドイツで生まれる推進力となった²¹。

21 ヨーゼフ・フルンケース「解説」（ハインツ・シュラッファー『ドイツ文学の短い歴史』所収）242頁参照。

ヘルダー（1744年-1803年）の「シェークスピア」（1773年）は、ハーマン（1730年-1788年）に始まる²²シュトルム・ウント・ドラングの運動に明確な輪郭を与えた。「できるかぎり、自己の歴史に則って、つまり、自己の時代精神、習俗、意見、言葉、国民的先入観、伝承、好みなどに従って、自己の戯曲を工夫する」という劇作家のための創作指針が宣言された²³。それはまた、全ヨーロッパを巻き込んだヨーロッパ初の国際戦争といわれる「三十年戦争」（1618年-1648年）の主戦場となったドイツの国民がその悲劇を耐え抜き、荒廃と疲弊からの復興の兆しを実感した国民的自負と自覚の表現であった。ドイツの古典派とロマン派は共にドイツの古からの民族の詩情の再生とドイツの一般市民の要求と文学的教化を目指して生まれた運動を同根的に源流とするのである。

ゲーテは1795年5月執筆の雑誌掲載論文『文学のサンキュロット主義』（Literarischer Sansculottismus）で、ドイツには、古典的な国民散文作家が誕生するような文学活動環境と経済基盤が確立していないことを強く訴えている。しかし、この時すでに『ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命』の『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』への改作がシラーとの「デモーニッシュなものなせる出会い」（『対話 1829年3月2日』）によって開始されていた。ゲーテが経験と考えているものを「それは経験じゃありません、理念です」と言い放つ「教養あるカント学者」と、「強情な現実主義者」のゲーテとの「極端に相隔たった二つの精神」の友情によって国民的教養小説『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』（1794-96年）が誕生するのである（論文『シラーとの出会い』（1817年）③28-9頁）。

ゲーテが演劇小説『ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命』を教養小

22 エルンスト・カッシーラー著、中埜肇訳『自由と形式—ドイツ精神史研究』ミネルヴァ書房、1983年、93頁。Cassirer *FREIHEIT UND FORM* Darmstadt 1991 (1916).

23 ヘルダー著、登張正實訳「シェークスピア」（『ヘルダー／ゲーテ』、＜世界の名著＞38、中央公論社、1998年所収）188頁。

説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に改作するのに本格的に着手したのは、1794年4月のことである。「7月以降、ゲーテとシラーは、深い友情によってむすばれる。このときからシラーが没するまでのおよそ10年間こそドイツ古典主義の輝かしい最盛期である」²⁴。

シュタイガーは「測りがたい作品」、『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』について「この小説の人物たちは被制約性と目的、特殊と普遍との間をさまよう、つまりあの一様独特な浮遊状態に置かれることになる。この状態こそゲーテの最も古典主義的な信念に適うものなのである」という²⁵。

しかし同時にまた、このドイツ文学の古典時代の1794年から1805年までのほぼ10年は、初期ドイツ・ロマン派への流れが強まってゆく時代でもある。このために「偉大な古典主義、ロマン主義の精神のうねりは、その最大の、もっとも包括的な代表者にちなんで『ゲーテ時代』と名づけられた」時代もあったのである²⁶。

1794年フィヒテがイエーナ大学哲学教授に就任する。初期ロマン派を代表する作家ティーク（1773-1853）は1796年にロマン主義的作品、1797年に諷刺や機知をほしいままにしたロマン的イロニーがたっぶりの童話劇『長靴をはいた牡猫』を発表する。ついでゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1795年1月-1796年10月）にならった長編小説『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』（1798年）を出す。

F・シュレーゲルは『ギリシア文学研究論』（1797）、『共和制の概念』（1798）。そしてシュレーゲル兄弟はロマン派の機関誌『アテネウム』

24 前田敬作・今村孝「解説」『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』（潮出版社版『ゲーテ全集』第7巻）567頁。

25 E・シュタイガー著、三木正之・小松原千里・平野雅史他訳『ゲーテ』人文書院、上巻1981年・中巻1981年・下巻1982年。E. Staiger *GOETHE* Atlantis Verlag, Bd.1,1957(1952),Bd.2,1956,Bd.3,1959。シュタイガー『ゲーテ 中』112頁。「ゲーテの最も古典主義的な信念」については、『ゲーテ 中』（227-253頁）の「理論的後奏」を参照。

26 アルベルト・ビルショフスキ『ゲーテ その生涯と作品』1218頁。

(1798-1800) を刊行、さらにノヴァーリスの『夜の讃歌』(1800)、小説『青い花』(1802) が出版されている。

初期ロマン派の人々はいずれもゲーテの最高傑作『若きヴェルテルの悩み』を読んで育ち、ゲーテの教養小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に刺激されて創作活動を続けた英才たちであった。「ゲーテの文学は議論の当初から、本来のゲーテ盛期古典主義の作品とみなされている『ローマ悲歌』『ヘルマンとドロテーア』『ヴィルヘルム・マイスター』に至るまで浪漫主義の青年たちにとり文学的理想であった。ゲーテの文学はそれ以後も、あらゆる批判を受けたが、依然として浪漫主義の模範であり鑑であった。これに関連してもうひとつ目につく現象がある。すなわちシュレーゲル兄弟が古典主義文学と浪漫主義文学を実際に対比させる場合、古典古代文学と近代文学をまさに意味していたのである²⁷。」世界文学に名を残す詩人ゲーテの存在を「その批評文をつうじて最初にドイツ国民の前に示したのは、なんといってもロマン派の人たちだった」のである²⁸。

彼らは言葉と言葉の結合と解体、言葉と言葉の化学反応的な側面を、ギリシア、ローマのことにホメロスとギリシア神話から十分に学んでいた。いうなれば、ゲーテの子供にあたる時代の超エリートの集団である。期待の若者たちであった。

ドイツ・ロマン派の最高傑作と言えるノヴァーリスの『青い花』は、ゲーテとシラーとの成果である『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』の出来ばえに満足できず、それを越えることを自覚して書かれた珠玉の名作である。ノヴァーリスは母語ドイツ語とドイツ民族の詩情は、ゲーテとシラーが築き上げた古典主義的文学作品を凌ぎ得るものであることを自らの作品によって証明するのである。

27 ヘルマン・アウグスト・コルフ著、加藤慶二訳「古典主義形式の本質」(1927年)
(相良守峯監修、H・O・ブルガー編著『ドイツ古典主義研究』エンヨー、1979年
所収)187頁。

28 アルベルト・ビルショフスキ『ゲーテ その生涯と作品』788頁。

一方で、追われるゲーテは彼らの知ることのない世界を知っていた。出自とする市民社会の他に王侯貴族の社会を知っていた。初期ロマン派の若者たちが前者の世界より知らなかったのに対して、宮廷社会というまったく別の世界を知っていた。二つの世界をゲーテのように深く知る者は、世界文学史上そう多くはない。ゲーテはもう一つ彼らの経験したことのないことを経験していた。それは、戦争の残酷と戦争での人間の無力の経験である。1792年43歳の時の従軍と敗戦退却の悲惨（『滞仏陣中記』）。それと翌1793年の小規模の戦でしかも勝ち戦であったとは言えマインツの戦である（『マインツ攻囲』）。

ゲーテは、ロマン派の機関誌『アテネウム』が創刊された1798年の10月に、芸術雑誌『プロピュレーエン』（古代ギリシアの神殿に通じる門）を創刊する。しかし、新しい時代の^{すうせい}趨勢であるロマン主義の台頭によって、早くも1800年には第3巻で廃刊となる。しかし、その「無限で」、「自由で」、「永遠に生成しつづけ」、「けって完成することのない」、「発展的な普遍文学」としての「ロマン主義文学」を宣言し要請した『アテネウム』もまた1800年に廃刊になる。

新進気鋭の若きロマン派は、永遠の未完成を理念として物語の^{ロマンス}創作活動を行う文学的運動であるとともに、憧憬を大気にして、そこで呼吸し、そこに^{サークル}想う青春の特権的な生命の光輝の時代の集団である。永遠の未完成の理念を志向し続けながらも、特権的な青春の終焉にともなってロマン派の活動の生命力が衰微することもまた事柄の必然である。詩人の魂は永遠のロマンティックである。しかし青春のロマンティックの輝きは有限である。それは生の法則である。「反復する思春期」とは大詩人ゲーテの老年の諧謔である。それはゲーテ自身が語る処である。「私は、恋愛詩や『ヴェルテル』を二度とは作らなかつた。非凡なものを生み出すあの天啓 (göttliche Erleuchtung) は、つねに青春や創造力と結びついているのだ」と（『対話 1828年3月11日』）。

3. ゲーテとロマン派の人々との交流の継続

ゲーテとロマン派の人々との交際は途絶えたことがなかった。ヘルダー(1744-1803年)はドイツのロマン主義を語る上で欠くことの出来ない人物である。ゲーテは21歳にヘルダーを知って以来、ヘルダーを師と仰ぎ兄と慕う。1802年ゲーテ53歳の時に、ゲーテは12歳になった愛息アウグストの堅信札をヘルダーにとりおこなってもらっている。またロマン派の理論家フリードリヒ・シュレーゲル(Friedrich von Schlegel.1772-1839)は、ゲーテの戯曲『旧時代と新時代』の表題を『パレオフロンとネオテルペ』(旧弊家と新しがりや)に改題するよう提案し、ゲーテはそれを受け入れる。1800年11月なかば頃のことである²⁹。ロマン派の代表的な作家ルートヴィヒ・ティーク(1773-1853)は、シュレーゲル兄弟が構想した「発展的普遍文学」の理論を実行した人物である。〈神童〉と見なされたティークは4歳で聖書を読み、10歳でシュトルム・ウント・ドラング時代のゲーテの戯曲『ゲッツ』を暗誦し、12歳の頃までには、ルソーの『告白』やゲーテのシュトルム・ウント・ドラング時代の『若きヴェルテルの悩み』を読み終えている。「ティークは当時の言い方をすれば、〈自分自身を感じる方法〉を『若きヴェルテルの悩み』とルソーから学んだ世代のひとりであった」³⁰。このティークは、1828年、ゲーテの79回目の誕生日パーティーに招待されている³¹。

また、ロマン派の人々と深い親交があり、ロマン派哲学の基礎となった美的観念論を1800-01年にたてた哲学者シェリング(Friedrich Schelling 1775-1854)に対して、シェリング宛書簡1800年9月27日では、貴誌の「22頁以下の一般的考察は、まるきり私の確信から、また私の確信のために書

29 熊田力雄「解説」『パレオフロンとネオテルペ』(潮出版社版『ゲーテ全集』第5巻)416-7頁参照。

30 リュディガー・ザフランスキー『ロマン主義 あるドイツ的な事件』89頁。

31 トーマス・マン「市民時代の代表者としてのゲーテ」(1932年)『トーマス・マン全集⑨』佐藤晃一訳、新潮社、1971年、239頁。

かれたものといってよい」と深い共感を表明している。

また後期ロマン派を代表する詩人、小説家、劇作家の一人であるアヒム・フォン・アルニム（1781-1831）との交流は、1805年7月のいわゆる「イエナー一般文学新聞における、ロマン派芸術に対するゲーテの最初の攻撃」のあった後も親しく続いている³²。

4. 国民文学から世界文学への移行とロマン派文学の再評価

ところで、ゲーテの心を捉えていたものは、国民文学から世界文学への移行であり、ロマン主義に対する文学的評価、それと古典主義とロマン主義の対立の緩和である。

1805年、シラーは昇天する。ゲーテは若い友の死を自分の身体の半分を失ったようだ、と嘆く。しかし、ゲーテは自分が詩人であることの使命を静かにしかも驚異的な形で継続する。

1796年（47歳）国民的古典文学『修行時代』を完結。1803年12月18日にヘルダー永眠（59歳）。1805年5月9日にシラー永眠（46歳）。同年1805年のディドロの『ラモーの甥』の翻訳と注釈。その後のゲーテの作品は、1809年の『親和力』、1810年の自然科学論文『色彩論』、1811年の自伝『詩と真実』第一部、1812年の『イタリア紀行』、1816年6月6日に妻クリスティアーネ永眠、1819年の『西東詩集』、1821年の『遍歴時代』第一部、1829年の『遍歴時代』完成。1830年10月27日に愛息アウグストのローマにての客死。1831年自伝の『詩と真実』と『ファウスト』の完成。不幸が続く中で仕事は進められる。

ゲーテは自己の内なる才能の自覚をその作品によって表わす。ゲーテが創作に際して、唯一理念を持って取り懸ったという『親和力』は、古典的国民文学という規範性と倫理性から自由に、文学活動をする意欲の表れであろう。『親和力』は、ゲーテが世界文学の理念を念頭に書いた文学の

32 このことについては、アルベルト・ビルショフスキ『ゲーテ その生涯と作品』「老年期の始まり」（781-792頁）を参照されたい。

ための文学の試みである。『親和力』はゲーテが「意識的に一貫した理念」を表現しようとした唯一の大作だった。ゲーテは『親和力』の文学的価値を次のように見ていた。「文学作品は測り難ければ測り難いほど、知性で理解できなければ理解できないほど、それだけすぐれた作品になるということだ」(『対話 1827年5月6日』)。短編『ノヴェレ』にみるロマン主義的詩情、『遍歴時代』の全編に溢れる明朗とユーモア。新たなゲーテの誕生である。

第三章 ゲーテの問題の覚書「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである」は、ゲーテが定義を意図したものではないことの論証的考察

1. 論証的考察 —その1—

ゲーテの遺稿から発見された一片の覚書がゲーテの著作の『箴言と省察』(格言と反省)に、収録されている。それは、現在までのゲーテ全集のなかで最も新しい、現在も出版継続中の通称フランクフルト版の『ゲーテ全集』では、第十三巻の『ゲーテの散文からの言葉』(GOETHE *SPRÜCHE IN PROSA*)の239頁に見られる。次のようである。

Classisch ist das Gesunde, romantisch das Kranke.

(FGA13-239)

上のドイツ語の文章は「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである。」と訳される(『箴言と省察』⑩333頁)。

ところで、ゲーテの晩年の或る日の午後のことである。何時ものように対話相手の若いエッカーマンに向かって「健康的なものはクラシックなものであり、病的なものはロマンティックなものである」とゲーテは語る。高揚した雰囲気の中でゲーテの口を突いて出た言葉を引用する。

(話題は、最近のフランスの詩人たちのことへ移り、クラシックとロマンティックの意味についての話になった。)「私は新しい表現を思いついたのだが、」とゲーテは言った、「両者の関係を表わすものとしては悪くはあるまい。

(A)「私は健康的なものをクラシックなもの、病的なものをロマンティックなものと呼びたい。」(Das Classische nenne ich das Gesunde, und das Romantische das Kranke.) そうすると、(B) ニーベルンゲンもホメロスもクラシックということになる。なぜなら、二つとも健康で力強いからだ。(C) 近代のたいていのものがロマンティックであるというのは、それが新しいからではなく、弱々しく病的で虚弱だからだ。古代のものがクラシックであるのは、それが古いからではなく、力強く、新鮮で、明るく、健康だからだよ。このような性質をもとにして、古典的なものと浪漫的なるものとを区別すれば、すぐその実相を明らかにできるだろう。³³⁾ (『対話 1829年4月2日』。 (A)、(B)、(C) は引用者による³⁴⁾

ゲーテが対話相手のエッカーマンに語ったことの論理的構造は、(C) である。従って (A) であり、(B) である、と言うものである。(C) 古代のものがクラシックと呼ばれるのは、それが力強く、新鮮で、明るく、健

33 “Das Classische nenne ich das Gesunde, und das Romantische das Kranke.

Und da sind die Nibelungen classisch wie der Homer, denn beide sind gesund und tüchtig. Das meiste Neuere ist nicht romantisch, weil es neu, sondern weil es schwach, kränklich und krank ist, und das Alte ist nicht classisch, weil es alt, sondern weil es stark, frisch, froh und gesund ist. Wenn wir nach solchen Qualitäten Klassisches und Romantisches unterscheiden, so werden wir bald im Reinen sein.” (FGA12-324. 下線引用者)。

34 エッカーマン著、山下肇訳『ゲーテとの対話』(上・中・下)岩波書店〔岩波文庫〕1993(初版1969)年。以下同様、山下肇訳を引用する。

康だからであり、古いからではない。近代のものの多くの作品がロマンティックと呼ばれるのは、それらが弱々しく病的で虚弱だからであり、新しいからではない。作品がクラシックかロマンティックかの判定基準は、作品が強いか弱いか、健康か病気かである。つまり、(A) 健康的なものはクラシックなものであり、病的なものはロマンティックなものである。従って (B) 紀元前8世紀頃の古代ギリシアの叙事詩ホメロスがクラシックと呼ばれるように紀元後12世紀頃の中世ドイツの英雄叙事詩『ニーベルンゲン』もクラシックと呼ぶことができることになる。

ゲーテのこの発言には、論理的な一貫性がある。しかし当然のことながら、冒頭に紹介した覚書の「クラシックなものは健康的なものであり、ロマンティックなものは病的なものである」(α) と対話の発言の「健康的なものはクラシックなものであり、病的なものはロマンティックなものである」(β) という双方の間の整合性が問題になる。

対話での発言の *Das Classische nenne ich das Gesunde, und das Romantische das Kranke.* の箇所を、「私は古典的なるものを健全なるものと、浪漫的なるものを病的なるものとよぼう。」と翻訳する亀尾英四郎訳の『ゲエテとの対話抄』(岩波文庫1938年)の例はある³⁵。

亀尾訳は第一に、冒頭で紹介した覚書の「クラシックなものは健康的なものであり、ロマンティックなものは病的なものである」(α) を根拠にしているものと考えられる。第二に、「クラシック」と「健康」の二つの言葉を比較した時の、概念の包摂関係からしての妥当性に対する配慮が考えられる。例えば、クジラと哺乳動物という二つの言葉が、概念の包摂関係からして、「クジラは哺乳動物である」というように結合された文を構成するのは、一般的かつ論理的に正しい。しかし何の断り書きもなしに「哺乳動物はクジラである」とは言わないということである。その上にさらに、第三の理由が加わると考えられる。1829年の対話での発

35 エッケルマン著、亀尾英四郎訳『ゲエテとの対話抄』(岩波文庫) 1938年、226-7頁。

言のほぼ2年前にやはりゲーテ自身がエッカーマンに向かって語った言葉の根拠にしているものと考えられる。正確を期すために、丁寧に引用紹介する。

「私には近ごろいよいよわかってきたのだが」とゲーテは言った、「詩というものは、人類の共有財産であり、……詩的才能などというものは、そんなに珍しいものではないし、誰にしても、すぐれた詩をものにしたからといって、うぬぼれるだけの格別のいわれがある筈がない、ということ、誰もが心にきざみつけるべきだよ。……国民文学というものは、今日では、あまり大して意味がない、世界文学の時代がはじまっているのだ。……しかし、外国文学を尊重する際にも、特殊なものに執着して、それを模範的なものと思いこんだりしてはいけないのだ。支那の作品が模範だとか、あるいはセルビアの作品が、あるいはカルデロンが、あるいはニーベルンゲンが模範だ、などと考えるてはいけないのだ。むしろ、何か模範となるものが必要なときには、いつでも古代ギリシア人のもとにさかのぼるべきなのだ。古代ギリシア人の作品には、つねに美しい人間が描かれている」(『対話 1827年1月31日』)。

ここに引用したゲーテの発言の中にある、時代はもはや「国民文学」の時代ではなく「世界文学の時代」が既に始まっているというゲーテの認識について興味のある処であるが、脇道にそれないように心掛ける。重要なのは、ゲーテは世界文学の時代の文学が模範とするべきものは何かという観点で話をしているということである。そしてゲーテは、唯一無二の模範は「古代ギリシア人の作品」であるという見解を確固とした態度で表明している。これは古典古代の作品を模範にして、これに倣う古典主義の姿勢である。「古代ギリシア人の作品には、つねに美しい人間が描かれている」ことから明らかなように、「クラシックなものは健康的なものである」(αの前半部分)と言うことである。しかし、1829年の「健康的なものはクラシッ

クなものであり、病的なものはロマンティックなものである」(β) という発言での「ロマンティックなもの」についての言及は上で引用した1827年の発言にはない。従って、1827年の発言は亀尾訳の前半部分の有力な根拠であるに止まる。

論点を整理する。1827年と1829年の発言に共通するものは、クラシックとは何か、何を指して古典的と呼ぶかという問題である。前者はギリシア・ローマの古典古代の作品をクラシックと呼び、後者は強くて健康な作品をクラシックと呼ぶというものである。ゲーテが、クラシックの概念の一義性を確定するために、どちらか一方を選択したという様子は見られない。

特に取り上げることはしないが、1827年の発言と1829年の発言には、話をしている時のゲーテの意識に違いが見られる。前者では「世界文学の時代」を強く意識しており、後者では中世のドイツ文学の傑作、英雄叙事詩『ニーベルンゲン』に心があるようである。2年後の発言はゲーテの意識が、世界文学から国民文学の方に回帰したことによるものではないことは言うまでもない。

1827年と1829年の発言に共通するものは、クラシックとは何か、何を指して古典的と呼ぶかという問題である。あくまでも古典ないし古典的という言葉に限ってのことであるが、そうして悪戯にゲーテに従うわけではないが、古典的という言葉の使用の変遷の歴史は、「健康的なものはクラシックなものである」というクラシックの語の使い方を容認する。

「古典」という言葉は、紀元前5、6世紀にローマの完全な市民権をもつ市民(ローマ人有産階級)を指す言葉として生まれた。それが時代が下って、古代ローマ後期の文法学者で作家のゲリウス(123年頃—165年)以降には、ただ単に「模範的」ということを意味するようになった。従って古典クラシック的な著作家、古典クラシック的な人物、古典クラシック的なものとは、模範クラシック的な著作家、模範クラシック的な人物、模範クラシック的なものという意味であった³⁶。

36 クルト・ヘルベルト・ハルパッハ著・加藤慶二訳「古典主義の概念と本質について」(1948年)(相良守峯監修、H・O・ブルガー編著『ドイツ古典主義研究』エンヨー、1979年所収)38頁参照。

「古典的なもの」がギリシアやローマの古典古代を模範とするようになるのは、ルネサンスの人文主義によって、ギリシア・ローマの古典古代の学芸が、あらゆる文化芸の模範となったことによるのである。人文主義の学問研究的な意識は、文学において詩文の理論を持たない野蛮と思われる現状から抜け出すために、古典古代の理論や手本を手がかりとして、国民文学の言語や韻律や内容を鍛えていくという方向に向うことになる。ルネサンス運動によって評価された「古典古代の国際的ないし超国家的教養」を基礎にして自分たちの「民族の国民的文学」に新たな活力を与えようとする文化意識が育ってくることになる³⁷。文化的知性は、国際的に誇りうる新しい国民文学の誕生を目指す。ルネサンスによって、ヨーロッパは古代のラテン語の文学の水準の高さに驚嘆し、憧憬し、それを目標にする。俗ラテン語から派生したロマンス語族系国民例えばイタリア、スペイン、フランスは、叙事詩においてはウェルギリウス、悲劇においてはセネカ、喜劇においてはテレンティウスとプラウトゥス、抒情詩においてはホラティウスとローマの^{エレジー}悲歌詩人たちを、それぞれ模範として文学の創作活動をするようになる。ロマンス語族系国民のローマ的なものに対する「精神的な親近性と歴史的連続性」から、当然のこのように生まれたのが擬古典主義と呼ばれる文化意識である³⁸。それによって、「古典的」の語は、単なる「模範的」という意味の一般的な形容語ではなく、ローマの古典古代的なものを指すようになる。

整理すると次のようになる。①古典という語はローマ人有産階級を指し示す。ローマ人有産階級はローマの権力と模範の象徴であるから、古典と言う語には、権力と模範の意味が既に含まれていた。②時代が下って、古典という語は、この語が持っていた権力と模範の意味を表現するだけになっ

37 ルードルフ・ウンガー著、内田俊一訳「ドイツにおける擬古典主義と古典主義」(1932年)(相良守峯監修、H・O・ブルガー編著『ドイツ古典主義研究』エンヨー、1979年)81-97頁参照。

38 同上書85頁参照。

た。しかし③ルネサンスの人文主義によって、古代ギリシア・ローマの諸々の作品が特権的にステータス化したことによって、古典という語は古代ギリシア・ローマの作品のためにのみ限定的に使用されるようになる。古典という語は、対象は異なるけれど、再び指示対象を含意することになる。古代ギリシア・ローマの作品が唯一無比の権威的模範とクラシックと呼ばれることになる。そのうちのロマンス語族系国民における古代のラテン語の文学に対するこのような文化意識は基本的に擬古典的と呼ばれる。

一般にフランス古典主義と呼ばれる17世紀のルイ13世、14世の治世の文学活動は、絶対王政と一体になって、第一に古代ローマの理論や作品を模範とし、古代ギリシアの理論や作品を模範にする場合も古代ローマの文化文芸を介して模倣しそれを摂取する世界に誇るものであった。文学活動は強力な国家の事業の一環であった。ゲーテは、真正とも純正ともいえる擬古典主義者ヴィンケルマン³⁹をこよなく敬愛する。その限りにおいてゲーテは擬古典主義を擁護する。しかし、17世紀以来フランスが擬古典主義のメッカである。ゲーテの意図が何処にあるかに拘わらず、ドイツにおける古典の語の適用の仕方では、古典の語の②の段階程度であるというのが、ある意味ではドイツの当時の実状に適していると言えなくはないのである⁴⁰。

しかし、いずれにしてもこのままでは、ゲーテの問題の覚書や発言をさらに論証的に考察することは出来そうにない。新たな論考の手懸りを求めたい。

ゲーテの覚書：Classisch ist das Gesunde, romantisch das Kranke.

39 同上書83頁参照。

40 ドイツは、ヨーロッパにおける30年戦争（1618年-1648年）の主戦場という災禍にみまわれ、国土は荒廃し、人口は激減する。国は主権を認められた大小300以上の領邦に分裂した。ゲーテの時代になってもその状態は変わらず、フランスとは異なり強力な中央集権が不在の状態が続いていた。ドイツの諸王侯貴族たちは、模範として積極的にフランスの啓蒙思想と古典主義を取り入れ、各々の領邦の教育の促進と文化文芸の振興を図るのが現状であった。

(クラシックは健康なものであり、ロマンティックは病的なものである。)は、現在までのゲーテ著作集とゲーテ全集のなかで最も新しい充実したフランクフルト版の『ゲーテ全集』では、第十三巻の『ゲーテの散文からの言葉』(GOETHE SPRÜCHE IN PROSA)の239頁にある。その第十三巻の804頁に、編集者のハーラルト・フリッケ (Harald Fricke)による、そのための注解がある⁴¹。フリッケは『ゲーテとの対話』(1829年4月2日)の問題の発言部分を、そのまま引用した上で、注解を行っている。フリッケの注解部分は思い切り説明的に訳出して、通しで引用する。

「私は健康的なものをクラシックなもの、病的なものをロマンティックなものと呼びたい。そうすると、ニーベルンゲンもホメロスもクラシックということになる。なぜなら、二つとも健康で力強いからだ。近代のたいていのものがロマンティックであるというのは、それが新しいからではなく、弱々しく病的で虚弱だからだ。古代のものがクラシックであるのは、それが古いからではなく、力強く、新鮮で、明るく、健康だからだよ。このような性質をもとにして、古典的なものと浪漫的なるものとを区別すれば、すぐその実相を明らかにできるだろう。」(『ゲーテとの対話』1829年4月2日)

「ゲーテはこの有名で、評判が悪いコメントによって、クラシックとロマンティックの二つの概念から歴史の重みを切り離すよう仕掛けたにもかかわらず、同時にまたこの言葉によって具体的には当時

41 第十三巻の編集責任者、ハーラルト・フリッケ (Harald Fricke) を代表人格として考察する。JOHANN WOLFGANG GOETHE SÄMTLICHE WERKE. BRIEFE, TAGEBÜCHER UND GESPRÄCHE. JOHANN WOLFGANG GOETHE SPRÜCHE IN PROSA, *Sämtliche Maximen und Reflexionen*, Herausgegeben von Harald Fricke Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main 1993, Bd. 13, S. 804.

のヨーロッパ、特にドイツのロマン主義の運動に対する懸念を示した。^{42]}

ゲーテは「この有名で、評判が悪いコメント」によって、前者のクラシックの概念からはそこに含まれる時間と歴史の重みを切り離し、後者のロマンティックの概念からはそれが持つ時代性を取り除こうと仕掛けた節がある。しかし同時にまたこの言葉によってドイツの後期ロマン主義の運動に対する懸念を示したのである、とフリッケは注解する。

フリッケの注解の仕方と内容は、我々に少なくとも次の3つのことを示唆する。① 「箴言と省察」に収められた遺稿の覚書は、1829年の発言と同じ時期のものであること。② 1829年の覚書は1829年の対話の発言内容に沿って、「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである。」(α)から「健康的なものはクラシックであり、病的なものはロマンティックである」(β)へと意味の構成を変換することが可能になる。しかもフリッケはそちらの方向に読者を誘導していると考えられなくはないこと。③ゲーテのロマンティックなものについての言及は、政治的、社会的時事問題に対する関心によるものであること。以上考えられるフリッケの3つの示唆の内、②は一つの文が、二つの意味を構成する可能

42 フランクフルト版ゲーテ全集、第13巻、804頁には次のようにある。

“Das Classische nenne ich das Gesunde, und das Romantische das Kranke.

Und da sind die Nibelungen classisch wie der Homer, denn beide sind gesund und tüchtig. Das meiste Neuere ist nicht romantisch, weil es neu, sondern weil es schwach, kränklich und krank ist, und das Alte ist nicht classisch, weil es alt, sondern weil es stark, frisch, froh und gesund ist. Wenn wir nach solchen Qualitäten Klassisches und Romantisches unterscheiden, so werden wir bald im Reinen sein.”

Obwohl Goethe mit dieser berühmt-berüchtigten Bemerkung die Begriffe tendenziell zu enthistorisieren beginnt, richtet er sich zugleich noch konkret gegen die zeitgenössische Bewegung der europäischen und insbesondere deutschen Romantik.

性を示す。覚書:Classisch ist das Gesunde, romantisch das Kranke。(クラシックは健康なものであり、ロマンティックは病的なものである。)には、対話発言: Das Gesunde ist classisch, das Kranke romantisch。(健康的なものはクラシックであり、病的なものはロマンティックである。)という意味に沿った、意味変換の可能性が発生する。即ち覚書:Classisch ist das Gesunde, romantisch das Kranke.という一文が、主語と述語を倒置して、別の意味を構成するようになる。③の示唆は、全く新しい視点からの考察を可能にしてくれる。そうして、このフリッケの指摘に倣いたい。

ところで、問題の発言の前半部分と後半部分では、後半部分の「ロマンティック」ないし「ロマンティックなもの」についてのことが何を意図し、何を根拠にしたものであるかが、今までのところ一向に判然としない。まず思いつくのは、修辞法の対比的な表現によって、テーマになっているものを鮮明にするという習慣化されたレトリックである。このクラシックとロマンティックの対句的表現はゲーテの関心が主にクラシックにあってロマンティックはクラシックを引き立てるための単なる添え言葉と考えることができなくはない。何故ならクラシックという語は、古代ローマ以来ヨーロッパにおいて親しみある語であったが、古典主義という用語の誕生は、ドイツ初期ロマン派が「ロマン主義」(Romantik)という用語を造語したことが直接の動機であると考えられている。古典主義とロマン主義の文学上の用語の誕生の経緯は古典主義と言ったらロマン主義、逆にロマン主義と言ったら古典主義という対句構造を自然な言い回しとして認めるからである。このような修辞学的な説明はあながち無視することの出来るものではないが、しかしこのことはそれにしても些末すぎて、我々の求める厳密な論証的考察を満足させてくれるものではない。

さらにもう一つ考えられるのは、問題の覚書や発言についての考察を心理分析的なアプローチの仕方で行ってみるということである。ゲーテは年を重ねても自制しきれない憧れの魅力に怯えるようになる。晩節を汚すことのない年齢相応の憧れをともし書いている。溢れる憧れ、今やこのロマン

ティックで危険極まりないものを封印するために、病気、病氣と一人書齋で書き留めたのかもしれない。同じ79歳の問題の覚書と問題の対話での発言は全く別々の話なのかもしれない。考察の心理分析的なアプローチは様々に枝分かれし止まることを知らない。しかしいずれにしても偉大な詩人の心の自在、融通無碍な働きを問うことは、慎むべき^{そんたく}付度の域を出ないことのように思われる。何故なら「偉大な芸術家のこころというものは常に自己の芸術作品の形式よりも大きく、かつ繊細である。⁴³」からである。

我々がフリッケの③の指摘に倣うのは、フリッケの注解は、慎重ではあるが、同時にまた事柄の核心を衝いていると考えられるからである。フリッケの指摘は、ゲーテが表現上はロマンティックの概念について、文学の問題について、語っているが、その真に意図するところは後期ロマン主義の政治への傾斜に対する深い危惧の念であるということである。しかしこの問題に入る前に、一旦今までの範囲内での経過的な結論を試みことにする。

広辞苑を引くと、定義の項に次のように書いてある。「定義(definition)」: 概念の内容を明確に限定すること。すなわち、ある概念の内包を構成する本質的属性を明らかにし他の概念から区別すること。その概念の属する最も近い類を挙げ、さらに種差を挙げて同類の他の概念から区別して命題化すること。例えば、「人間は理性的(種差)動物(類概念)である」。

おおらかに言い換えるなら、定義とは、物事や言葉を明確に規定し説明することである。そのために、言葉や概念の曖昧さを除去することである。ゲーテの敬愛する無私の哲学者スピノザ⁴⁴によると、定義とは否定である。ここまでの厳密を求めないとしても、ある言表が、それが成功しているか

43 ヘルマン・アウグスト・コルフ著、加藤慶二訳「古典主義形式の本質」(1926年)(相良守峯監修、H・O・ブルガー編著『ドイツ古典主義研究』エンヨー、1979年所収) 192頁。

44 ゲーテは自伝『詩と真実』の「第三部第14章」の終わりの部分で、スピノザの『エチカ』「第五部定理19」の「神を真に愛する者は、神も自分を愛してくれることを望んではならない」という文章を引用する。ゲーテは、スピノザのこの「完全な無私の精神」によって深い安らぎを得たのである(『全集』⑩178~179頁)。

否かにかかわらず、定義と見なし得るためには、多義性を排除し、一義性を獲得しようという意思と姿勢が不可欠である。

さて、ゲーテの問題の「Classisch ist das Gesunde, romantisch das Kranke.」という文章は、ゲーテが「古代ギリシア人の作品」が文学の最上の「模範」である（1827年）と考える時には、「クラシックは健康なものであり、ロマンティックは病的なものである」という意味を形成する。しかし、作品の評価基準を「力強く、新鮮で、明るく健康で」とあるということに置くと（1829年）、その場合は一転して、「健康的なものはクラシックであり、病的なものはロマンティックである」という別の意味を形成する。文学の評価についての二重の評価基準によって、一つの文章の主語と述語が入れ替るることになる。これは多義性の増幅であり、ここには多義性の排除による一義性の追求という定義の基本的姿勢が見られない。従って、問題の覚書と対話の発言は定義の意図の要件を満たしていない。

2. 論証的考察 —その2—

ドイツ・ロマン主義は、18世紀の90年代に始まり1830年ないし35年までを一時期とする文学運動である。これは初期ロマン派と後期ロマン派とに区分される。世界文学の歴史に重要な足跡を残したのは、初期ロマン派であり、後期ロマン派は文学においてより政治史の中で取り上げられる。初期ロマン派はシュレーゲル兄弟とノヴァーリス、そこに更に1799年のティークの参加によって最盛期となった古い大学都市イエーナ時代の文学運動を指す。イエーナ・ロマン派と呼ばれるのもそのためである。ティークによるとイエーナに集まった若者たちの「精神とさまざまな計画、人生と詩と哲学によせるぼくらの希望は、いわば機智と気まぐれと哲学の不断の祝祭」であった⁴⁵。シュレーゲル兄弟、ノヴァーリス、ティークは若くしてゲーテに親しみ、^{ギムナジウム} 高等中学校で古代ギリシア・ローマの文学を学び、

45 鈴木潔「解説」『ティーク』（『ドイツ・ロマン派全集 第一巻』国書刊行会、1983年）358-9頁。

古典語と古典的な教育を身につけていた。その内の誰かがウェルギリウスの一節をラテン語で吟唱すると居合わせる者も共に暗誦し、また誰かがホメロスの『イリアス』的一幕の序章を朗読すると誰かがその後を受けて誦そらんじることの出来る青年たちであった⁴⁶。F・シュレーゲルがゲーテの薦めるスターンのユーモアをあれは上流社会の代物ですと拒もうと、ティークが詩的に『修行時代』を越える長編小説を書こうと、ノヴァーリスがゲーテをマイセンの再輸入業者と揶揄しようと、ゲーテにとって彼らは頼もしい、ある意味うらやましい、そして好ましい青年たちであった。何故なら、レッシングから始まるドイツ古典主義への道のりはフランス古典主義を基礎づける古代ローマの学術文芸の源泉である古代ギリシアの詩論と文学にまで遡って、そこから出発しようとするものであった。ゲーテの青年時代を遙かに越えている彼らのギリシアの古典に対する強い憧れと深い教養はドイツ文学にとっての宝に他ならなかった。ロマン派の雑誌のタイトルの『アテネウム』はアテネ神殿の名に由来するものであり、プラトンのイデアにちなむ『イデーエン断章集』、アリストテレスの学園の名にちなむ『リュツェウム断章集』、これらの雑誌や書物の名前がそのことを象徴する。ゲーテはノヴァーリスを守り、F・シュレーゲルの指摘に従って戯曲のタイトルを変更している。ティークとの交流は生涯にわたって絶えることがなかった。

46 近代歴史学の祖と称されるレオポルト・フォン・ランケ (1795-1886年) は、『ランケ自伝』(林健太郎訳、岩波文庫、1975 (1966) 年) で「ドイツにとっての古典的な時代の文学運動」(77頁) に言及し、ゲーテとシラーについて語っている。ランケは、イエーナに程近いナウムブルクにあるトラピス修道会の流れをくむ有名な中高等学校フォルタ学院で学んだ。先輩には哲学者のカント (1724-1804年) と同じ年に生まれた、ドイツ近代詩の父クロプシュトック (1724-1803年) がいる。更にイエーナ・ロマン派の思想上のリーダーの哲学者フィヒテ (1762-1814年)、理論家のシュレーゲル兄弟 (兄1767-1845年/弟1772-1829年)、天才詩人のノヴァーリス (1772-1801年) がいる。『ランケ自伝』(29-37頁) に古典語、古典教養の修得の様子が述べられている。そのランケの時代の光景からシュレーゲルやノヴァーリスの時代を思い浮かべて描いた。後輩に哲学者ニーチェ (1844-1900年) がいる。

しかし、1801年に天才詩人ノヴァーリスが29歳の生涯を閉じる。その遺稿『青い花』の出版に力を尽くしたティークが1802年イエーナの地を去る。それによって、イエーナ・ロマン派の饗宴は事実上その幕を閉じるのである。ディルタイがロマン主義運動の最盛期とみなすのもこの時代のことである。一方のその後のほぼ30余年の後期ロマン派において文学運動は政治運動に傾斜し、彼らは20世紀のナチスの極右反動的イデオログの理論の拠り所にさえなったのである。

カントやシラーをはじめドイツの偉大な知性は、隣国のフランス革命の残虐な事件と混乱を目の当たりにして、暴力革命を強く否定し、それを忌避する。ここでフリッケの言うロマン主義的運動とは後期ロマン派のことを指す。

ゲーテは詩人であるとともに自然科学者でもある。宮廷の政務の他に、ヴァイマル公国の大学都市イエーナ大学図書館長も務めていた。ゲーテは性格からしても心情からしても、常に若い世代に対して共感的であった。ゲーテはルターの宗教改革300年祭とライプツィヒ戦勝祝賀集会のためにアイゼナハへ出かけてゆく若者を目の当たりにしながら、「アイゼナハにむかう若者たちが羨ましく思います」と手紙に認めている（「ヴィレマー宛書簡 1817年10月17日」⑤192頁）。その祭典は2年前の1815年6月にイエーナ大学で結成された学生組合が中心になって举行されたものであった。

しかし、その一方において、ゲーテが後期ロマン派の芸術家のことを苦々しい思いで見えており、彼らのことをほとんど憤りに近い感じを持って見ていたこともまた事実である。「芸術家には食い扶持だけあてがって、あとは彼らがやれることを、やりたいことを勝手にさせておくべきだという原則は、無政府主義の精神から発するものです」。「これこそ真正銘の無神論だ」とさえ認めるからである（「ボアスレー宛書簡 1817年5月27日」⑤189頁）。しかし、詩人にして作家のゲーテの文学上の態度の真骨頂は続く次の言葉の内にあると言わなければならない。ゲーテはこう続けるのである。「しかしまだ残っているたくさんのよいもの、すぐれたもの、筋道

のたつたものがそのために亡びさえしなければ、いまの騒ぎなどは何事でもありはしないでしょう。」(同上)

しかし、遂にゲーテの最も恐れる事件が起きる。1819年、劇作家でヴェイマルの劇場監督やウィーンのブルク劇場の監督を務めたことのあるコツェブー(1761-1819年)⁴⁷が、極めて民族主義的な色彩をもつイエーナの学生に殺された。この暗殺事件は、ヒューマニストであるゲーテの到底容認しえないものであった。またゲーテは若い学生たちが不当に弾圧される事態になることを危惧した。さらにはイエーナで誕生した初期ロマン派の文学的成果も含め、ロマン主義的思潮が根絶やしにされる事態になることを憂慮し危惧した。

以上のことが、我々がフリッケの③の指摘に倣う理由である。フリッケの注解は、慎重ではあるが、同時にまた事柄の核心を衝いていると考えられるからである。フリッケの指摘は、ロマンティックという言葉について、ゲーテの言葉は文学上の問題についてを装っているが、ゲーテの真に意図するところは後期ロマン主義の政治への傾斜に対する深い危惧の表明であるということであるからである。

しかし、念には念を入れて、ゲーテがエッカーマンに向かって、具体的に文学作品を挙げながら、ロマンティックな要素について、否定的なことを語る箇所を攫^{さら}ってみることは、必ずしも無駄なことではない。例えば、ユゴーの一つの作品をとらえて「不幸でロマンティックな傾向」(『対話 1831年6月27日』)、スタンダールの『赤と黒』の2、3の女性の性格描写が「少しばかりロマンティック」(『対話 1831年1月17日』)などと言っている。しかし一方においてまたゲーテは、ユゴーの才能にも拘らず、若いころの詩が「古典派の杓子定規に邪魔されている」と嘆いたり、「擬古典派」の批判もする(『対話 1827年1月4日』)。いずれにせよゲーテにとって、彼らフランスの「ロマン派の俊才」たちは愉快な存在であり

47 E・シュタイガー『ゲーテ 下』502頁参照。

(『対話 1830年3月14日〔10日〕』)、頭上に女工帽を載く大作「民衆を導く自由の女神」(1830年)を画いたフランス・ロマン主義のドラクロワはゲーテの忘れることの出来ない才能である。

ここでドイツの文学・芸術の世界とフランスのそれとの、精神的基盤の相違について認識することが重要である。

「フランス文学は明確に定義づけられ成文化された古典主義とロマン主義とをもっている。フランスのロマン主義は、意識的な反古典主義であることによって、他のすべての諸国のロマン主義と異なっている。フランスではロマン主義と古典主義は革命と旧体制アンシャンレジームの如くに対立している。スペインとイギリスはロマン主義はもっているが、古典主義はもっていない。ドイツは両者をもっているが、そこにはきわめて重要な変化が見られる。すなわち、ロマン主義と古典主義が同じ時代に、部分的には同じ場所に、生きていたということである。1798年のイエーナのロマン主義は、1795年のワイマール古典主義の反映であり意識化であり、部分的にはその批判である。他方、晩年のゲーテには多くのロマン主義の精髓が感じられる。だがわが国の古典主義時代の作家には、いずれの陣営にも数えられない偉大な作家—ジャン・パウル、ヘルダーリン、クライスト—もあり、1750年から1832年にいたるドイツの開花期は、古典主義—ロマン主義という分母では割り切れないのである⁴⁸」。

ゲーテの『ファウスト』の石版画を制作したドラクロワに対して、ゲーテはこの「芸術家の偉大な知性」と「完全な想像力」によって、「ゲーテ自身の表象を凌駕して」、「すべてが生きいきと」描写されていると絶賛する(『対話 1826年11月29日』)。芸術家において、この種のことのいずれもがよくある事であろう。芸術家の真骨頂はその作品にあるのであって、直観的感覚的な自由奔放な発言はそこに如何なる矛盾が見て取られ

48 エルンスト・ローベルト・クルツィウス著瀧内横雄訳「古典」(1948/54)(相良守峯監修、H・O・ブルガー編著『ドイツ古典主義研究』エンヨー、1979年所収)71-2頁。

ようと一向にかまうことはないのである。またあれほど急進的なもの嫌いなゲーテが、純粋に文学のこととして、「フランス文学」にみられるウルトラ・ロマンティッシュ「急進ロマン派的な方向」について、今はじまったばかりの文学革命は、「文学そのものに益するところ大である」と述べる。（『対話 1830年3月14日〔10日〕』）。

さて、ところで、1829年の4月に問題の発言をしたゲーテは、同じ年の12月にエッカーマンに向かって次のように語っている。

すでに前の方の幕においても、「クラシックなものとロマンティックなもの」(das Klassische und Romantische)が、たえず鳴り響いたり、語られたりしているのに気づいただろうが、それというのも、坂道をのぼるみたいに、ヘーレナのところにまでのぼって行って、そこでこの「二つの文学形式」(beide Dichtungsformen) がはっきりと現われて、「一種の和解」(eine Art von Ausgleichung) に達するようになったわけだよ。

「フランス人にしても、」とゲーテはつづけた、「今ではこの関係を正確に考えはじめていますよ。「クラシックなものもロマンティックなもの」と彼らはいっている、「どちらも同様、結構なものだ。大切な点はこの形式を理性的に利用して、その中で傑出したものをつくり出すかどうかということだ（『対話 1829年12月16日』）。

この同じ年のゲーテの言葉は、文学の創作活動において、「クラシックなものとロマンティックなもの」は車の両輪のようなもので、理性の力でそれを巧みに塩梅良く操れるか否かが、芸術家の腕の見せ所であるということである。クラシックなものは健康的で、ロマンティックなものは病的であると言うような、不可解な言葉ははたして文学の世界に関してのことなのであろうかという疑問さえ湧いて来るのである。

更に我々はゲーテ自身の作品を手掛かりにして、この辺の事情を検証す

ることとする。それには何といても専門家の助けがある。このことをゲーテがシラーの助けを得て書き上げた最も古典主義的長編小説『修行時代』の翻訳家とゲーテ研究家に尋ねることとする。何故ならゲーテの作品の言葉の文字の裏まで細大もらさず理解しているのは翻訳家であり、ゲーテとゲーテの作品を俯瞰的かつ大局的に把握し得るのは何といてもゲーテ研究家だからである。その前に、自らも翻訳出版をしているゲーテの翻訳者の意味について振り返ってみる。

「翻訳家はすべて、この普遍的・精神的交易の仲介者として努力し、その交易を促進することを自分の生業なりわいにしている者と見なされなくてはならない。というも、翻訳だけではふじゅうぶんだとどれほど言われようとも、翻訳が普遍的世界交通のなかでもっとも重要な、もっとも価値ある仕事のひとつであることにかわりはないからである。（『ドイツ小説』、エジンバラ、1827年。全集③95頁）

さて、『修行時代』の二人の翻訳者の共同見解は次のようである。

この小説には数多くの人物が登場する。〔主人公の〕ヴィルヘルムは、市民社会、俳優たちの世界、貴族階層にぞくするさまざまな人物たちとの接触を通じて成長していく。……（中略）……これらの人物たちのなかでいちばんいきいきとした印象をのこすのは、ロターリオ男爵でもナターリエでもなく、フィリーネとミニヨンと豎琴弾きという、いわば非教養小説的な三人のわき人物たちである。ゲーテの詩的空想力が生みだしたこの三人の忘れがたい形姿のためにくりかえしこの小説を読もうとするのは、あまりにも素朴で感傷的な読者だけであらうか⁴⁹。

49 前田敬作・今村孝「解説」『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』（潮出版社版『ゲーテ全集』第7巻）572頁。

古典主義的作品の金字塔である『修行時代』の中で、ひときわ文学的光彩を放つのは、ロマンティックなもの、ロマン主義的なものである。ところで、ゲーテとシラーの共同による『修行時代』が古典的国民的文学作品と呼ばれるのは、それがフランス古典主義的修辭学的文彩を巧みに取り入れているからではない。そこには、宮廷が放つアウラの輝きも、貴族制の理想とする様式も、擬古的な形式遊戯や感覚の遊びもない。何故ならドイツ古典主義への道のりは徹底して民衆からのもの、下からのものであって上からのものではないからである。『修行時代』が古典的国民的文学作品と言われるのは、この作品が当時のドイツの演劇による国民全体の芸術教養教育と文化再生を担う「国民演劇」という国民的運動の中で、ヴィルヘルムが成長する姿をいきいきと描いたという理由による。しかし、より根本的な理由として「ドイツ文学の肯定的で内的な統一性」の要をなす「キリスト教の神秘的、プロテスタント的、そして何より敬虔主義的な方向性」が示されていることがある⁵⁰。それを象徴するのが「第六章 美しいたましいの告白」である。それにしてもこの作品は読み進むのに、最初は骨の折れる作品である。二人の翻訳家は、この謹厳実直な教養小説がフィリーネとミニヨンと豎琴弾きのロマンティックなものなしには、文学として成り立たないのではないか、と語り合ったのではないかとさえ思えるのである。そうして、『修行時代』を読んだ者で、この二人の見解に首肯しない者は誰一人いないであろうと思うのである。

ゲーテの深い読み手であるシュタイガーは、ゲーテが「随分昔に」書いた『演劇的使命』という作品の「編集者」となって『修行時代』の仕事に取り組み始めたというゲーテの言葉を紹介する。ゲーテとシュタイガーの双方の気分がそれとはなしに伝わってくるような書き出しである。しかし、ミニヨンを語る時のシュタイガーには特有の精神の緊張のようなものがある。彼は述べる。ミニヨンの死の哀惜^{あいせき}に対して、「古典主義的慰めはなす

50 ハイイツ・シュラッファー『ドイツ文学の短い歴史』28頁参照。

すべを知らない」(der klassische Trost versage.)、なぜなら、ミニヨンの「二重の憧憬」のうちに、私たち個々の人生の「苦しみ、深い悲哀の恍惚も、青春の魅力も、感涙にうるむ眼差し」も、これらすべてが凝縮されていると言えるからである⁵¹。

ミニヨンの「あの二重の憧れ」(jene doppelte Sehnsucht) (⑦469頁。FGA9-905) とは、幼くして旅の一座にさらわれた不幸な孤児の美少女ミニヨンが抱く「故国をもう一度みたいという願い」と「ヴィルヘルムに対する思慕の情」の二つの「深い憧憬」のことである(『修業時代』⑦467頁)。そのどちらもが、手をのばしているようなもので、その対象は、どちらも「ミニオンの思いつめた気持ちにとって」(vor diesem einzigen Gemüt) はるかに「手のとどかない」(unerreichbar) ところにあるのである(『修業時代』⑦467頁)(FGA9-901~902)。

そしてこの薄幸の美少女の心を苦しめているものは「激しい嫉妬の感情」と当のミニヨンが「まだ自覚していないほどの暗い情欲の思い」とである(『修業時代』⑦469頁)。ハインツ・シュラッファーは、ミニヨンのような人物は「それまでの文学のレパートリーには存在しなかった」のであり、それは「魂の鉱山技師たる」「ロマン主義の詩人」のものであると述べる⁵²。それにしても、はげしい絶望におそわれたミニヨンのまえに「聖母マリアが姿をあらわされて」、「面倒をみて守ってあげようと約束してくださった」と言う、ミニヨンの幻視幻聴は何とけなげなことか(『修業時代』⑦467頁)。

更にゲーテの古典期以降の作品におけるロマンティックなもの、ロマン主義的なものの果たす働きについて取り上げてみたい。シュタイガーは、ゲーテに就いて興味のあることを言っている。それはゲーテの或る作品に関連しての言葉であるが、「なんといってもゲーテは抽象的・思弁的な方法を全くとっていない」、また「彼は、芸術作品を『それ自体において』、『内在的法則から』説明することがない」、「彼は芸術家を観客から、与える者

51 シュタイガー著『ゲーテ 中』144頁参照 (Bd.2, S.171~2)。

52 ハインツ・シュラッファー『ドイツ文学の短い歴史』130-2頁参照。

を受けとる者から決して切はなさず、理想的な解決に代えて、常に実現可能な解決だけを迷うことなく提案している」⁵³。それ故にゲーテは、極めて雄弁であるとともに寡黙である。

ゲーテは、「憧憬」(Sehnsucht) という同じ題の詩を二度歌っている。一つは圧倒的に美しく、「おお 常にこの世でもあの世でも 永久に心に愛を感じていたい」と歌う、推定1775年(26歳)の頃の詩である⁵⁴。もう一つは「こんなにもわたしの心を引きつけるのは何だろう？」で始まる、推定1802年(53歳)の古典期の作品である⁵⁵。ゲーテが「憧憬」という言葉に抱く思いの深さは「意識的に一貫した理念を表現しようとした唯一の『大がかりな作品』」と言う『親和力』の中でも明らかである(『対話 1827年5月6日』)。親しい友人に『親和力』は「三度読まなければならない」と言ったと伝えられる、この長編小説は、1808年から9年にかけて、59歳から60歳のゲーテが書き上げた。無理に理解しようと意気込むと難解この上ない作品である。しかし自然に読み進んでいっても明瞭なことは、この作品がロマン派的な象徴でいっぱいということである。

シュタイガーは『親和力』を捉えて、「天使たちや聖者たち、ナザレ派の絵画や北方の墓、振子の実験や神託や未来を予感させるしるし、無意識界を開示しようとする魔術的遊戯、運命悲劇、夢と死など、壮大なロマン派のパノラマがわれわれの眼前にひらく」、「この作品にはめ込まれた無数のロマン派的象眼をどう考えるべきであろうか」と述べる⁵⁶。そして彼はこの頃のゲーテの「会話や手紙などをみる限り、そこにはロマン派を拒否するしばしば誇張した性急な調子の言葉があるばかりで、われわれにはほとんど何も明かしてくれない」と付け加えてもいる⁵⁷。ゲーテは、ゲーテ

53 シュタイガー、『ゲーテ 上』394頁

54 高安国世訳「憧憬」(Sehnsucht) (人文書院版『ゲーテ全集 I 詩集』50頁。FGA1-705.)

55 山口四郎訳「あこがれ」(Sehnsucht) (①52～3頁。FGA2-59～60.)

56 シュタイガー、前掲書、441頁。

57 シュタイガー、前掲書、442頁。

が唯一理念をもって書いたというこの問題作を、美しき乙女オスティーリ
エの死を「憧憬をこめた悲哀とともにその不在がなげかれる」と謳って、
終えるのである。ゲーテが、若き乙女の死の哀惜は、憧憬と悲哀という二
つの逆方向のベクトルの感情の結合による以外に、それを表現する技法を
知らないと言っているかのようなのである。

我々は今ゲーテの古典期の最盛期の作品の『修行時代』とその後に書か
れた『親和力』において、ロマンティックなもの、ロマン主義的なものが
如何に重要な働きをしているかを確認することができた。この二つの作品
は後に1829年12月になってゲーテが対話相手のエッカーマンに向かって
語って聞かせたこと、つまり言葉芸術にとって「クラシックなものと同
ロマンティックなもの」、この「二つの文学形式」が際立って重要であることを、
「抽象的・思弁的な方法」によってではなく、実際の作品によって雄弁に語っ
ているのである。

我々がゲーテは「ロマンティックなもの」という言葉と「病的なもの」と
いう言葉を結合することによって何を言おうとしているかを考えざるを得
ないのはこのためである。それは、ゲーテが古典期の最盛期の作品の『修行
時代』においてさえ、「魂の鉱山技師たる」「ロマン主義の詩人」と互いに共
振しあうものをもっていたことを知ることによって一層深まるのである。

ところで我々のテーマは「クラシックは健康的なものであり、ロマン
ティックは病的なものである」という言葉によって、果たしてゲーテは何
かを定義する意思があったのであろうかを考察することであった。経過
的結論では、ゲーテの多義性の方向に向かう姿勢は、定義の姿勢の反対の
方向に向かうものであり、そこに定義に対するゲーテの意思を見て取るこ
とはできないという暫定的結論に至った。その上で、高い評価を得て現在も
継続中のフランクフルト版ゲーテ全集第十一巻の編集者のフリッケの見解
に倣って、「ロマンティックは病的なものである」と言われる時のロマン
ティック、ロマンティックなもの、更にはロマン主義的なものとは、ロ
マン主義の内の後期ロマン派を念頭にしていると考えた。

しかし、それだけでは当然のことながら不十分であると考えた。そこで、推理小説にみるような消去法的な行程を念頭に考察を進めることにする。消去法的論証は緩慢ではあっても、検証事項が確定されている場合には、最も基本的で堅実な論証方法の一つである。しかし、この度の考察においてはテーマの性格上、主要な検証事項の一つを取り上げるに止まる。「ロマンティックは病的なものである」と述べたゲーテその人の人生において、ロマンティックなものは決して病的なものではなかったことを、ゲーテの自伝『詩と真実』から明らかにする。

ゲーテは16歳の時、ライプツィヒ大学に入学するために初めて故郷を離れてライプツィヒに向かう。ゲーテはその時の気持ちを、人生を自分の力で切り開く「ロマンティックな名誉あること」と述べる（『詩と真実 第二部』⑨215頁）。スイスでは「チューリヒ湖の一部が見え、遠くに高い山々の尾根の青い連なりが目につり、それを眺めていると、限りない憧れが胸をみたした。手をのばして、その峰々の名前を口にしたりした」（『詩と真実 第四部』⑩277頁）。ゲーテは常に「過去と現在との一体感」、つまり過去と現在がひとつにまとまった感覚の中で、創作活動を続けた（『詩と真実 第三部』⑩176頁）。なんとも奇妙な感情、「幽霊のようなものを現在へとよみがえらせる直観」の働きを感じただけでなく、作品にもそれが現わされていると、ゲーテは述べる（『詩と真実 第三部』⑩176頁）。ゲーテは次のようなことも言っている。

「聖者の洗礼名にかわつて、ドイツの教会に浸透してきた歴史的で詩的な洗礼名は、洗礼をほどこす牧師の怒りを往々にまねく結果になったが、疑いもなく、ロマンティックで文学的な虚構のささやかな枝葉の問題と見なしてよいであろう。ほかに格別の意味がなくても、響きのいい名前をつけて、自分の子供に品位をくわえようというこうした衝動は称賛していい。このように想像の世界を現実の世界と結びつけることは、その人間の全生涯にわたって優雅な光輝を広げ

るものである」（『詩と真実 第三部』⑩21頁）。

以上の限られたゲーテの言葉に照らしてみても、ゲーテにとって、ロマンティックなものは決して病的なものではない。ロマンティックはもとより、憧憬も虚構も、病的なものとはその本質を異にするものなのであることは明らかである。

『ゲーテとの対話』で知られるエッカーマンは、ゲーテの自伝『詩と真実』の成立過程でも協力している。エッカーマンは第四巻のゲーテとリリーの恋愛の移り行きを「ここに描かれた生涯の時期は、やはりきわめてロマンティックな様相をおびている。あるいは、この時期はゲーテの成長にともなって展開していくためにロマンティックになるといい（『対話 1824年8月10日』）。但しこの引用のみエッカーマンの言葉）。

この章の課題は、ゲーテの問題の覚書や発言は、決してクラシックなものやロマンティックなもの定義ではないこと、当然のことながら古典主義やロマン主義の定義でもないことを、論証することである。もう一つの結論に入りたい。つまり、ゲーテ全集の編集者のハーラルト・フリッケの注解と指摘に倣って、問題のゲーテの発言は、クラシックのことは文学上のことを、ロマンティックのことは政治・社会上のことを、念頭に置いてのものであるという見解にたって、そのことについての結論を述べる。

ここでは概念の領域・分野の二重性が問題になる。ゲーテはクラシックの概念については、文学の分野のこととして取り上げ、ロマンティックの概念については、政治・社会の分野の時事問題の視点で言及している。一つの文章、それも極短い対句的構造の文章が、一方は文学の分野、他方は政治の分野の問題として成り立っている。二つの別々の分野のことを一つの文章で表現するのは、二重の分野による多義性ないし混乱を誘導する。従って、ここには多義性の排除と一義性の追求による概念の明晰判明を目的とする定義の基本的姿勢が見られない。

3. 論証的考察 —その3—

以上の考察から我々は次のことを指摘することができる。ゲーテ研究で定評のあるフリーデントールは、『ゲーテ —その生涯と時代—』(Goethe *Sein Leben und seine Zeit*)で、出典を表記しないまま、次のように述べる。「古典的なもの」(das Klassische)とは彼〔ゲーテ〕にとっては端的に、「健康で、美しく、真なるもの (das Gesunde, Schöne, Wahre) であり、「ロマン的なもの (das Romantische)」とは「真ならざる、病的なもの (das Unwahre, Kranke) である」⁵⁸ と。

フリーデントールは、出典を表記しないままで、これがまるでゲーテによる断定的な判断であるかのように述べるのである。引用したフリーデントールの言葉が、我々の問題にする1829年のゲーテの覚書とエッカーマンに向かつての発言に依拠するものであることは明白である。典拠と論拠が示されることなくこのような趣旨のことが明言されることに、大きな戸惑いを覚えずにいられない。

さて我々が問題にしているテーマについての解釈をもう一つ紹介する。カール・オットー・コンラディの『ゲーテ 生活と作品』での解釈を紹介する。それは、翻訳本で上巻下巻の通しで1236頁にわたるこの浩瀚な研究書の最終部分に出ている。「老年の視野」の章の「時流の傍観者」の節に次の様にある。

「人間の健全な天性が一つの全体として働いている」(『ヴィンケルマン』12,98) ことを望み、ギリシアの彫像が表わす人間の形姿に美の模範を見ようとする者は、ロマン主義の傾向を病的なものと思なざるをえない。無限なもの、超越的なもの、幻想的なものなど、存在の夜の部分を求め、あげくの果てはグロテスクなもの、さらには個の

58 リヒャルト・フリーデントール著、平野雅史・小松原千里・森良文・三木正之訳『ゲーテ—その生涯と時代—』下巻(講談社、1979年)346頁。Richard Friedenthal *GOETHE SEIN LEBEN UND SEINE ZEIT*, R.Piper & Co Verlag, München, 1963, S.717.

存在を切り刻むような苦痛な自己分析にまで至る病癡である。『古典主義的なものは健康であり、ロマン主義的なものは病的だ』という、エッカーマンに対する例の発言（1829年4月2日）は、このような関連においてのみ理解することができるのである⁵⁹。

しかし、我々はカール・オットー・コンラデーのこのような言葉に加担しない。これについては、後程改めて取り上げる。

第四節 詩人ゲーテのユーモア：「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである」を巡って

ゲーテによると、ユーモアには聞く相手を迷宮に誘うユーモアと、互いの顔をほころばせる破顔一笑、破顔談笑を誘うユーモアとがある。ゲーテは前者を「不機嫌なあるいは、悪しきユーモア」と呼び、後者を「明朗なあるいは、よきユーモア」と呼ぶ（『箴言と省察』（格言と反省）③399頁）⁶⁰。我々が問題にするのはもっぱら前者のゲーテの厄介な「不機嫌なユーモア」の方である。イロニーは、古代ギリシアの哲学者ソクラテスのイロニーの譬えの通り、お互いの軋轢を緩和する滑稽の一つとして古くから重宝されてきた⁶¹。「滑稽 das Lächerliche は、道徳上の対照が無害な方法で感性和関係づけられるところから生まれる」（『箴言と省察』（格

59 カール・オットー・コンラデー著、三木正之・森良文・小松原千里・平野雅史訳『ゲーテ 生活と作品』（下巻）、南窓社、2012年、1154頁。KARL OTTO CONRADY *GOETHE Leben und Werk* Artemis und Winkler Verlag, München 1994.

60 ゲーテの「ユーモアは天才の一要素である」という言葉があることで知られる『素朴さとユーモア』（1817年、全集③190-1頁）は、「不機嫌なユーモア」をテーマにするものである。

61 イロニーの概念は、初期ロマン派のシュレーゲル兄弟の出現によって大きく様変する。しかし、ここでのイロニーの概念は、プラトンの著作に出現する、またアリストテレスが『ニコマコス倫理学』等で概念説明する古典的な素朴な意味合いのイロニーのことである。

言と反省) ⑬389頁。FGA13-434) とは言い得て妙である。その中でもイロニーは自分を実際より小さく劣った者にみせる反語的表現によるカモフラージュの修辭術である。当然のことながら、自分の本心や才能をかくす自己韜晦とうかいにも通じる。用いられる反語は、緩和的な穏やかなものから文字通り正反対のものまでそのグラデーションとバリエーションは多彩である。

「ユーモア」(Humor, humor) や「イロニー」(Ironie, irony) ときたら、パラドックスも自然と加わることになる。何故なら、ゲーテの82年の生涯の最後のユーモアは「ひじょうにまじめな諧謔」、「ひじょうにまじめな冗談」というヴィルヘルム・フンボルト宛の手紙の言葉だからである。ゲーテは畢生ひっせいの大作『ファウスト』を「60年有余の歲月」の私の「非常に真面目な冗談」の集成として、是非読んでくれるようにと、ゲーテが最も信頼し尊敬する言語学者で政治家の18歳年少のフンボルトにお願いするのである(「フンボルト宛書簡 1832年3月17日」)。「真面目」と「冗談」(Scherz)、この互いに対立する言葉の結合は、急がば回れ式の対語結合の逆説表現⁶²に他ならない。逆説的表現のユーモアがゲーテの最後のユーモアであった

62 ゲーテの逆説の用例の一つ上げるなら、これまで何度も引用されている自伝のタイトル『詩と真実』(Dichtung und Wahrheit) に尽きる。ゲーテに「私の一生についての打ち明け話に付けた『真実と詩』という、むろんいささか逆説的なタイトルに関して」と認めたバイエルン王ルートヴィヒ一世宛の書簡がある。『真実と詩』(Wahrheit und Dichtung) はゲーテが普段好んで使ったタイトルである。出版の段階で『詩と真実』(Dichtung und Wahrheit) となったそうである。ドイツ語の Dichtung という語は、日本語の詩、文学、創作、フィクション、作り話、空想に当たる。ゲーテの好んだ『真実と詩』というタイトルに合わせると、真実とフィクション、真実と作り話、真実と空想、このように反対概念を結合させた「逆説的なタイトル」(der paradoxe Titel) について説明している。「バイエルン王ルートヴィヒ一世宛書簡 1829年12月17日/27日」(フランクフルト版『ゲーテ全集 第38巻』209頁。FGA38-209) を参照されたい。尚、潮出版社版『ゲーテ書簡集』(⑤244頁) では、「カール・フリードリヒ・ツェルターあて書簡 1830年2月15日」の中に上に引用した文章がある。しかしまた、フランクフルト版『ゲーテ全集 第38巻』228-9頁の「カール・フリードリヒ・ツェルターあて書簡 1830年2月15日」には、この文章は見当たらない(FGA38-228~229)。

のである。この最終節の考察に際して、我々はゲーテの不機嫌なユーモア、お惚け^{とぼ}と遜り^{へりくだ}のイロニー、それと対語結合の逆説表現を念頭におきながら話を進める。

ゲーテは1829年に彼の最後の長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、もしくは諦念のひとつと』を完稿する。ゲーテはこの『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代 第3巻最終章』の「マカーリエの文庫から」の中で、極上のユーモアをスターンの『トリストラム・シャンディ』の世界のうちに見出して次のように述べる（『遍歴時代』⑧415頁）。「彼の精神状態の二通りに解釈できる（zweideutig）矛盾について、彼はじつに優雅にしゃれのめしている」（『遍歴時代』⑧421頁）と。しかしまた、この歯切れのよい言葉に先立って、ユーモアを次のように説明的に解説している。

「ユーモア作家」（Humorist）は、「とりとめもないことをごちゃまぜに投げこむことが許されていて、読者が場合によってそこから何かを取り出すときは、分ったような分らないようなどっちつかずの意味合いをおびたまま、それをやっと思いだすことになっても、それは読者のご自由だと凶太くかまえている」（『遍歴時代』⑧237-8頁）。

勿論いざれも、不機嫌なユーモアについての解説である。

我々はゲーテの覚書：Classisch ist das Gesunde, romantisch das Kranke。（クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである。）をフランクフルト版（FGA）の『ゲーテ全集』の第十三巻の『ゲーテの散文からの言葉』（GOETHE SPRÜCHE IN PROSA）の編集者のハーラルト・フリッケ（Harald Fricke）の注解に従って考察を進めてきた。

ハーラルト・フリッケによると、ゲーテは「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである。」と言う「この有名で、評

判の悪い覚書」によって、①「クラシックとロマンティックの二つの概念から歴史の重みを切り離そうと企てた」、しかし②「同時にまたこの言葉によって具体的には当時のヨーロッパ、特にドイツのロマン主義の運動に対する懸念を示した」。

フリッケの注釈の①部分の論拠になっているものは、「私は健康的なものをクラシックなもの、病的なものをロマンティックなものと呼びたい。そうすると、ニーベルンゲンもホメロスもクラシックということになる。なぜなら、二つとも健康で力強いからだ。近代のたいていのものがロマンティックであるというのは、それが新しいからではなく、弱々しく病的で虚弱だからだ。古代のものがクラシックであるのは、それが古いからではなく、力強く、新鮮で、明るく、健康だからだよ。このような性質をもとにして、古典的なものと浪漫的なるものとを区別すれば、すぐその実相を明らかにできるだろう。」という言葉である。

「健康的なものはクラシックなものであり、病的なものはロマンティックなものである。そうすると、ニーベルンゲンもホメロスもクラシックということになる。」このことの吟味を試みる。このことを我々にとってより身近な日本文学の世界に置き換えて考えてみる。例えば、森鷗外や夏目漱石の作品を日本近代文学の古典的な作品と呼ぶことに誰一人として異論を唱える者はいないであろう。日本のシェークスピアと呼ばれる近松門左衛門を江戸文学の古典的な作家と呼ぶことに異論はないであろう。しかし当然のことながら奈良時代の『万葉集』、平安時代の『古今集』、『源氏物語』、更には鎌倉時代の『平家物語』と、近松、鷗外、漱石の作品を同列にあつかうことは出来ない。

それと同様、『ニーベルンゲンの歌』が中世ドイツの古典的傑作であると評価することに、誰一人として異論はないであろう。従って、ホメロスが古代ギリシアの古典であると同様に『ニーベルンゲンの歌』が中世ドイツの古典的傑作であるということに異論はない。しかし、中世のニーベルンゲンが古典として、紀元前8世紀頃のホメロスや紀元前1世紀のウェリ

ギリウスの作品と同等格の作品であるという人がいるとするならば、『ニーベルンゲンの歌』を愛するドイツ国民といえども、ある種の戸惑いと気後れを覚えることであろう。何故なら、古典古代の文学を愛好する人たちや研究者の間では、ホメロスとウェリギリウスの作品を同等格の古典的作品であると見做すことさえ、当然のことながら論議の分かれるところだからである。ゲーテの「健康的で、力強い」と言う漠然とした規準をもって、ニーベルンゲンもホメロスも同等格の古典であると言うのであれば、論拠が十分であるとは言い難い。発言者のだれ彼の区別なく、当然のことながら、誠実でタフな説明を要求されることであろう。

「古代のものがクラシックであるのは、それが古いからではなく、力強く、新鮮で、明るく、健康だからだよ」。この言葉について、考察する。発言によると、クラシックな作品の要件には、力強さ、新鮮さ、明るさ、それと健康が挙げられる。我々の日本文学にこの規準を適用しようとする、『万葉集』はこの要件を充足するが、雅びな『古今和歌集』の場合は果たしてどうかということになりそうである。万葉集からしても、数多くの挽歌や山上憶良の貧窮問答歌はどうかとなるであろう。物のあわれの『源氏物語』や諸行無常の世界の『平家物語』も、「力強く、新鮮で、明るく、健康」という規準と合致しないであろう。

また、ホメロスのイリアスにしても、アキレウスの呪わしい憤怒で貫かれた叙事詩であり、第一巻の疫病と憤怒の物語で始まり、トロイアの英雄ヘクトールの亡骸を父親が貰い受ける、残酷無惨な物語で閉じられる。オデュッセイアにしても、美しい甘い歌声で船乗りを惑わし死に追いやる鳥の形をしたセイレンや一つ目の巨人族のキュクロペスの活躍する世界であり、凄惨な「求婚者の殺戮」を経て初めてこの叙事詩は終焉する。考えて見れば、10年間続いたトロイア戦争の最後の数十日間を描写した戦争物語が、人によっては力強く新鮮であると読む人々がいたとしても、明るく、健康な物語であるはずはないのである。

しかし、フリッケは対話でのゲーテの問題の発言をゲーテの「脱歴史化」

(ent-historischen) の思想の表れと理解している。文学上のこととして、作品の創られた時代に関することは一切顧慮することなく、作品の価値を評価し、規定することはいかなることに繋がることになるのか。「力強く、新鮮で、明るく、健康だ」という言葉は一義的な性格のものではなく、国や時代によって、幅があるばかりでなく、美醜、美味不味のように土地と時代の風土・歴史・文化・趣味によって、判断が大きく分かれる傾向のあるものである。つまり、判断の規準は相対的である。歴史学的には、歴史主義的な相対主義の色合いを持つことになる。しかし、このことはゲーテの目指す世界文学の思想に則^{そく}わない。世界の文学を比較文化論的に相対主義的に捉えることに異論を挟むわけではない。そうではなく、ゲーテの世界文学の思想と一致しないという意味である。なぜなら、ゲーテは1827年1月31日での対話の際に、世界文学のレベルでは、模範となるものは唯一「古代ギリシア人の作品」あるのみと、エッカーマンに語っているからである。古典古代のギリシアの作品だけがクラシックの榮譽を担い得るものと、ゲーテが語るからである。

さて問題の核心に入りたい。ゲーテは、1795年5月に『文学のサンキュロット主義』(Literarischer Sansculottismus) という論文を執筆し、発表している。前の年に『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』(第1-3巻)を発売した。この年には続いて第4-6巻を発売し、翌年の1796年には第7巻と第8巻を発売し、『修行時代』の全巻を完結する。ゲーテがシラーの協力を得ての盛期古典主義時代の記念碑的作品の創作に余念のない真っ最中の年のことである。この論文でゲーテは、同年5月号の雑誌掲載論文での、ドイツ文学の歴史的事情を顧慮することなく、性急にドイツ文学の発展を要求する無理解極まりない文筆家に憤慨して、フランスの急進革命主義者にひっかけて慥然^{ぶぜん}として異議申し立てをする。『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』(第1-3巻)を発売した翌年に、時を計ったかのように、我がドイツには「古典的散文作家」(ein klassischer Schriftsteller)や「古典的国民作家」(ein klassischer Nationalautor)と呼ぶに値する作

家に乏しいと雑誌に書かれたのである。ゲーテは憤然と論じる。ドイツは三十年戦争の煽り^{あお}をくらって一つの国が、大小300余りもの主権のある領邦に分割され、文化的・文学的に恵まれない状態が長い間続いている。だからといって「ドイツに古典作品を産み出す契機になるかもしれないからといって、われわれは革命を欲したりしない。」そうとまでゲーテは憤る。この抗議のための論文には、いかなるユーモアもイロニーもない。修辭的表現さえもない。ゲーテは想像や装飾など一切捨てて、心のありのままを述べる。直叙の名文である。ゲーテは、ドイツの創作活動にとって劣悪以外のなにものでもない環境のなかで、「すぐれた文章」が育ってきているのではないか。貧しい恵まれない「生活環境」中で、この十八世紀の後半の間に、多くの人々のたゆまぬ「努力」と「労苦」のおかげで、ドイツの文学と国語は発展して来たではないか。渾身の抗議を行う。この抗議の論文でゲーテが問題とするテーマは、文体であり、文章である。ゲーテは切々と語る。「対象にいかにもふさわしい純粋な文体」(ein reiner, dem Gegenstande angemessener Styl)、「いい文章を書いている」(*gut zu schreiben*) 事実、「調和のとれたよい文体」(ein übereinstimmender guter Styl)「対象に即して、明晰にそして優雅にすぐさま表現する (dem Gegenstande gemäß mit Klarheit und Anmut darzustellen)」ための「数多くの文体例 (die vielen Beispiele des Styls)」。これらは、「ドイツの作家も相当な水準に達していること」の証拠である。ゲーテは文学を志す者の士気を挫く者は許せないと憤る(『文学のサンキュロット主義』③30-34頁。FGA18-319～324)。ゲーテにとって作品が古典的であるか、そうでないかの判定基準は、一にも二にも文体と文章の表現の力であり、それ以外のものではないことをこの論文は明瞭に語っている。

このゲーテの直叙の名論文『文学のサンキュロット主義』において、ゲーテが古典主義とドイツとの関係に関して、もう一つの重大な発言をしていることを見逃すことが出来ない。二人の研究者は次のように指摘する。ゲーテは、古典主義がフランスにおいて「国民国家的な定着」(die

nationalstaatliche Verwurzelung) を果たしたようには、ドイツに定着することは不可能であることを認識していた⁶³。

ドイツは「古典的作家や古典主義作品」の生れる「あらゆる前提条件を欠いているから」、ドイツには古典的作家や古典主義作品は存在しえないと、ゲーテはこの論文で述べているということである⁶⁴。そうして、ドイツにおけるこの政治的社会的状況とゲーテを取り巻くこの種の文学事情はゲーテにとって生涯変わることはなかった。

いずれにしても、ゲーテの壮年の憤慨と抗議を知った我々は、ゲーテを取り巻くより根本的な文学事情に、改めて立ち返ることを余儀なくされる。それはゲーテにとってどうすることもできない母語の混乱状態という、詩人の創作活動にとって決定的に不利な状況の下で、ドイツ近代文学のすべてが生成したという歴史的事実である。

「私の生まれた頃の文学上の時期 die literarische Epoche、……ドイツは長い間国じゅうが外国の諸民族で溢れ、他の国民が浸透した結果、学術上や外交上の会議には外国語を使用せざるをえなかった。そのためドイツは、自国の言語を形成する ausbilden ことが出来なかった。……ドイツ人はほとんど二世紀このかた不運な騒乱状態に荒廃していたので、社交上の儀礼をフランス人に学び、高貴な表現法をローマ人から習得した。しかも母語 die Muttersprache のなかでさえもこうしたことをしなければならなかった。」(『詩と真実 第二部』⑨ 230頁、FGA14-283~4)

63 エルンスト・ローベルト・クルツィウス著、瀧内楨雄訳「古典」(1948年/1954年)(相良守峯監修、H・O・ブルガー編著『ドイツ古典主義研究』エンヨー、1979年所収) 67頁参照。

64 ヴァルター・ムシュク著、洲崎恵三訳「ドイツ古典主義—悲劇的視座から」(1952年)(相良守峯監修、H・O・ブルガー編著『ドイツ古典主義研究』エンヨー、1979年所収) 251-2頁。

「自由な精神と快活な心」と、「誠実な、生真面目な気風」によって、ドイツ語は歪んだ言語の状態から脱してゆく。(『詩と真実 第二部』⑨230-1頁)「あらゆる分野におけるドイツ語と文体の発展につれて」、様々な分野が活発になってくることを、ゲーテは目のあたりにする(『詩と真実 第二部』⑨247頁)。ゲーテは若くして、言語のもつ力の普遍的偉大さを実感するのである。

このような時代の中で、ゲーテはよくはわからないまでも古代ローマの詩人ホラティウスの『詩論』を読み(『詩と真実 第二部』⑨233頁、FGA14-287)、その後でドイツの誇るレッシングの『ラオコオン』に出会う。それはゲーテのライプツィヒ大学の学生時代のことである。レッシングの『ラオコオン』を読むことによって、ゲーテの中で、「造形芸術と言語芸術の相違」(der Unterschied der bildenden und Redekünste)が初めて「明晰に」(Klar)になる。(『詩と真実 第二部』⑨281頁)「詩は絵画のごとく ut picture poesis」というホラティウスの詩論から解放され、これと決別する。(同上)

レッシングは「言語芸術家には、美の限界を超えることが許されているけれども、造形美術家は美の限界内にとどまらなければならない」というのである。(『詩と真実 第二部』⑨281)このことは、言語芸術に対するゲーテの絶対的傾倒を決定づける。(『詩と真実 第二部』⑨282)このことはまた一方において、ゲーテの美術鑑賞に対する関心を深め、ゲーテを優れた審美眼の詩人に育てる。ゲーテの言語芸術はさらに発展して行く。

イタリアから戻って直ぐの1788年の秋から1789年の春にかけての『ローマ悲歌』^{エレジー}は、「おんみの祭司ホラチウスが歓喜して予言したように」とホラティウスを賞讃する⁶⁵。ゲーテは、古代ローマ末期の恋愛詩の形式の「解放された生きるよろこび、健康、自然、官能と精神との調和」をたたえる「古

65 富士川英郎訳「ローマ悲歌」(人文書院版『ゲーテ全集 第1巻 詩集』1965(1960)年)127頁。「ホラチウス」は翻訳者。今井寛訳「ローマ悲歌」(潮出版社版『ゲーテ全集 1 詩集』2003(1979)年)122頁参照。

代調の艶情詩」⁶⁶で、ホラティウスを讃えるのである。詩人ゲーテの古代ローマ詩人ホラティウスとの南国イタリアの青い空の下での和解である。「詩文は絵のごとくに *ut pictura poesis*」という言葉に象徴されるホラティウスの詩論⁶⁷の再評価である。ゲーテのなかで、同時代のドイツのレッシングの言語芸術論とホラティウスの古典的な詩論が結合する⁶⁸。新たな詩人の誕生である。

この古典主義的詩人ゲーテの誕生から約25年後の1815年に、ゲーテは一つの画期的な評論を発表する。『限りのないシェークスピア』である。ゲーテはシェークスピアについて次のように述べる。

シェークスピアの作品には、「予言や狂気、夢、予感、靈兆、妖精や地霊、幽霊、妖怪、魔術使いなど」の「魔術的要素」や「数々の幻影」が登場する（『限りのないシェークスピア』⑬52頁）。たとえ作品の主成分ではないとしてもそうである。「シェークスピアの作品はいわば活気あふれた大きな年の市である。」（⑬51頁）「世界を意味している舞台」である。（⑬57頁）彼は良いものをいやそれどころか悪いものまでも、「非常な明朗さで」（mit großer Heiterkeit）「表現する」（darstellen）（⑬51頁。FGA19-641）。このような「シェークスピアの作品を支える大きな土台になっているものは、彼の生活の真実と堅実にほかならない」のだから「彼の筆になるものはすべて、あのように純粋で充実しているように思えるのである」（uns Alles, was sich von ihm herschreibt, so echt und kernhaft erscheint.）（⑬12頁。FGA19-641）。この点において、「シェークスピアはロマンティックと呼ばれる近世の詩人に属さず、むしろ素朴な部類の詩人に属する」（⑬52頁）。この後でゲーテは、次のような「対立概念（Gegensätze）」の一覧を提示する。

66 高安国世「訳註」（人文書院版『ゲーテ全集 第1巻 詩集』）385-6頁参照。

67 ルードルフ・ウンガー著、内田俊一訳「ドイツにおける擬古典主義と古典主義」（1932年）（相良守峯監修、H・O・ブルガー編著『ドイツ古典主義研究』エンヨー、1979年所収）89頁参照。

68 E・シュタイガー『ゲーテ 下』420頁参照。他に『ゲーテ 中』57頁、352頁参照。

古代的 (Antik)	／	近代的 (Modern)
素朴的 (Naiv)	／	感傷的 (Sentimental)
異教的 (Heidnisch)	／	キリスト教的 (Christlich)
英雄的 (Heldenhaft)	／	ロマンティック (Romantisch)
現実的 (Real)	／	理想的 (Ideal)
必然 (Notwendigkeit)	／	自由 (Freiheit)
当為 (Sollen)	／	意欲 (Wollen)

(『限りのないシェークスピア』⑬53頁。FGA19-641～2)

いま読んだ『限りのないシェークスピア』(Shakespeare und kein Ende)は1813年に執筆され、1815年に発表された⁶⁹。ところで、我々の問題にしているゲーテの覚書と対話中の発言のあった、1829年にゲーテは最後の長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の最終巻を完稿する。その中に次のような一節がある。

「詩人は表現を拠り所とする。」(Der Dichter ist angewiesen auf Darstellung.)「さらに続ける。」「最高の表現とは、表現が現実と競い合うこと、つまり、その活写が精神によって生命を吹き込まれ、その結果、だれもがそれをあたかも目の前の現実のごとくに思い浮かべることができるということである。文学はその最高段階においては、かえってごく外面的に見えるものだ。文学が内面に引きこもるにつれて、衰退の度を加える。——内面のみを表現して、これに外面による肉づけを行わない文学、あるいは内面を通して外面を感得させることのない文学、これらはともにそこからありきたりの生活に入ってゆくことになる末期的段階である。」(『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴

69 小岸昭「解説」『限りのないシェークスピア』(潮出版社版『ゲーテ全集』第13巻)439頁参照。

「ロマンティックなものはすでにその墮落の淵に落ち込んだ。近ごろの産物のひどさときたら、これ以上墮落したものはほとんど考えられないくらいである」(『箴言と省察』(格言と反省)⑩333頁)とも述べる。「ロマンティックなもの」とは、後期ロマン派時代の作品のことなのである。

ゲーテはシェークスピアの作品の生き生きとした力強い「表現」(Darstellung)が、シェークスピアの「生活の真実と堅実」から生まれてくるものであることに感動する。しかし同時にまたゲーテを感動させ、導くのは、シェークスピアの作品の内面深くに隠れているシェークスピアの「生活の真実と堅実」が産出する、シェークスピアの作品と作品の持つ表現の力以外の何ものでもないことを詳説する。

シェークスピアが、「非常な明朗さで」(mit großer Heiterkeit)「生き生きとした言葉によって」(durchs lebendige Wort) (⑩50頁。FGA19-638)、「表現する」(darstellen)時、「生命をもたないものまで」(Selbst das Unbelebte) (⑩51頁。FGA19-639)が、「あれほどまでに生き生きと」(so lebendig) (⑩52頁。FGA19-640)きそって語り始める。シェークスピアが教える言葉と表現の力が秘める「限りのなさ」(kein Ende)をゲーテは強調する。

『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』の執筆時代の1795年の評論『文学のサンキュロット主義』にあって、約20年後の1813年執筆、1815年発表の評論『限りのないシェークスピア』にはないもの。それは、ドイツ文学の勢いが盛んになっていく隆運の気運である。それと文献考証的には、「古典的」という言葉が、前者では使用されているが、後者では使用されていない。また「ロマンティック」という言葉や「ロマン主義」という言葉が、『文学のサンキュロット主義』には使用されていないが、後年の『限りのないシェークスピア』においては「ロマン主義」や「ロマンティック」について細心にはあるが、極めて踏み込んだ重要な発言がなされる。

二つの評論に共通するものは、文体と文章の表現の問題である。『文学のサンキュロット主義』では、対象や分野にふさわしい、「純粋な文体」、「いい文章」、「明晰に、優雅に」しかも「より迅速に」(Früher) 表現するように母語が彫琢され、整備・形成されていく様子が誇らかに描写される。

『限りのないシェークスピア』においてゲーテは、シェークスピアに託して読者の心を捉える表現の心得について繰り返す。「文学のサンキュロット主義」がゲーテの最後のシュトルム・ウント・ドラングつまり「疾風怒濤の嵐」と「抑え難い衝動」であるといえるものであるなら、後年の評論『限りのないシェークスピア』は、「常に心象であって、構想され、構築され、みがきぬかれた形式」(Denkbilder immer, geplante, errichtete, geprägte Form)、つまり「すっかり芸術」(ganz Kunst) になったものである⁷⁰。幾つもの重要なテーマを細密かつ明確に叙述するのである。

そして、この評論『限りのないシェークスピア』に関して特筆されなければならないことは、次の三点である。①ドイツ文学界の今と将来に対する憂慮と不安と期待の気持ち。②ゲーテが提示する、七組の対立概念のうちに「クラシック」という語はない。ゲーテの文学活動を構成する概念のうちに「クラシック」の概念が含まれていない。③「シェークスピアから教えられるものがあるとすれば」と前置して、ドイツにおいても「ロマン主義」と「和解する」ために「大きな対立を自己の内部で融和させるよう」ゲーテが人々に呼びかけていることである。(⑬55-6頁)

ロマン主義が対立すると言ったら、それは古典主義に対して対立するというのが周知の図式である。しかし、それにも拘らず、古典主義とロマン

70 オスカル・ヴァルツェル著、今泉文子訳「ゲーテとシラーの盛期古典主義における美的信仰告白」(1930年)(相良守峯監修、H.O.ブルガー編著『ドイツ古典主義研究』エンヨー、1979年所収) 218頁。BEGRIFFSBESTIMMUNG DER KLASSIK UND DES KLASSISCHEN (Herausgegeben von HEINZ OTTO BURGER, 1972, WEGE DER FORSCHUNG, BAND CCX) S.137.

主義の対立というお決まりの構図を言葉にすることを、ゲーテは慎重に回避している。そればかりか、ゲーテはロマン主義との和解宣言とも言えるこの評論で、クラシックという言葉と古典主義という言葉を一度も使用していない。詩人ゲーテの文学活動は、シュトルム・ウント・ドラング時代と、それに続く古典主義時代を経て、今また新たなステージへと進むのである。

ゲーテは、プレーメンのオリエント学者カール・イーケンに宛てた1827年9月27日付の書簡の中で次の様に述べている。「古典派とロマン派のはげしい軋轢はもうそろそろ和解に終わってもよい頃です」(Es ist Zeit, daß der leidenschaftliche Zwiespalt zwischen Klassikern und Romantikern sich endlich versöhne.) (㊦234頁)。「私たちが自己形成に努めること、これが何よりも必要なことです。誤った模範によってだめにされる心配さえなければ、何によって形成がなされようと、それは問うところではありません。……ギリシア・ローマの文学のなかにある、またそれに関する、広くかつ透徹した洞察のおかげなのです。私たちはこの高所に立って、最古のもの最新のものも含めて一切のものの真実な、倫理的・美的価値を尊重することを学ぼうではありませんか」(㊦234頁)。ゲーテは、生きる喜びをゲーテに授けた、母カタリーナ・エリーザベトの子である。何時いかなる時も希望を捨てることがない。

さてわれわれは更に問題の核心に入る。ゲーテはエッカーマンに向かって、「古代のものがクラシックであるのは、それが古いからではなく、力強く、新鮮で、明るく、健康的だからだよ」と語る。では、古代のものは「力強く、新鮮で、明るく、健康的」であるとゲーテが言う時、古代のものの何がそうであるとゲーテは言うのであろうか。ホメロスの『イリアス』は戦争の殺戮と破壊と絶望の世界をいやと言う程に描写する。『オデュッセイア』も奇怪なものの群れ、騙し、漂流、難破、あげくの果てのクライマックスは復讐のための殺戮である。そこは明るさと健康のかけらもない。では古代のものの何がゲーテは「力強く、新鮮で、明るく、健康的」である

と言うのであろうか。それは、今も人々を捉えて離さないのは、ホメロスのプロット、文体、文章の力、読ませる力である。文体と文章の生命力である。古代の作品の内容のことではなく、古代の作品の文体と文章のことについてゲーテは言っているのである。

ゲーテは「ホメロスと同様ニーベルンゲンも古典的だ、なぜなら、二つとも健康で力強いからだ」といった。従って、我々がホメロスについて言えたことは、ニーベルンゲンについても同様に言えなければならない。ゲーテは次のように述べる。『ニーベルンゲンの歌』(Nibelungenlied)も、そこに登場する「奇怪にして真率な、^{しんそつ}陰惨無惨な^{いんさんむざん}騎士の精神」(『西東詩集 注解と論考』⑤381頁。FGA3/1-280)も、この英雄叙事詩の「圈内に同化し」、「親しみと感謝」をもって見ないなら、「その姿は奇怪なもの」である(『西東詩集 注解と論考』⑤325頁。FGA3/1-201~2)。ニーベルンゲンに対する好悪の感情や親疎の差異の別なく、この作品が傑作中の傑作として現代においても変わらぬ高い評価を誇るのは、ニーベルンゲンの世界が今に蘇るのは、この作品のもつ表現の力であるに他ならない。ここにおいても、ゲーテ自身の言葉から、作品が古典的であることの要件は、第一にその作品の文体や文章の力、作者の筆が「力強く、新鮮で、明るく、健康的で」あることである。

「不機嫌」(der Unmuth)は、ゲーテによると「不断に利己的であり、不遜であり、拒否であり、何びともよろこばせない。」(『西東詩集 注解と論考』⑤336頁。FGA3/1-219) そうして「不機嫌な人間はだれしもが、自分個人の期待がかなえられなかったり、功績が認められなかったことをあまりにもはっきりとことばに出す。」(⑤338頁。FGA3/1-222)「格言の書」も「この詩人」の「不機嫌の書」と何ら変るところがない。(『西東詩集 注解と論考』⑤336~338頁。FGA3/1-219~222)ゲーテの不機嫌なユーモアを改めて聞いてみたい。「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである。」古典的な特権的地位にいる貴族階級にはいかにも結構な言葉であっても、ロマン主義の文学の側にいる者に

としては如何にも侮辱的な発言である。ゲーテはこんなことも言う。「オリエントの宮廷は無邪気な素朴さをよそおいつつ、まことは賢明にして狡猾なふるまいを保とうと留意している。」(『西東詩集 注解と論考』⑤385頁。FGA3/1-290)ゲーテは中流階級の市民から上流階級の貴族に列せられ、ヴァイマルの宮廷政治社会を「実人生」として活躍した賢明な実務家でもある。天才詩人タッソの二の前を踏むことのないように、長い宮廷生活の中で絶えず修辞術を磨いてきた詩人である。そのようなゲーテの言葉としては、問題の発言は余りに無防備で、直截的に過ぎるのである。

結び

本論の第三章において、ゲーテの問題の「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである」という覚書は、ゲーテがクラシックとロマンティックの定義を意図したものではないことを論証的に考察した。次のようである。1) 「論証的考察 —その1—」では、対話の発言から生まれる意味の多義性は、概念の一義性を目指す定義の要件を満たしていないことを明らかにした。2) 「論証的考察 —その2—」では、ア) ゲーテの古典主義的作品の金字塔である『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』(1794/1795/1796年)、それと長編小説『親和力』(1809年)においての「ロマンティックなもの、ロマン主義的なもの」の果たす文学的役割について考察した。イ) ゲーテの自伝『詩と真実』を手掛かりにしてロマンティックなものとの憧憬は掛け替えのないものであったことを確認した。ウ) 対句の領域・分野の二重性による多義性ないし混乱の誘導は、概念の一義性を目指す定義の要件を満たしていないことを明らかにした。3) 「論証的考察 —その3—」では、二人のゲーテ研究家の見解を紹介した。4) 「詩人ゲーテのユーモア : 『クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである』を巡って」、この考察においては、ア) 対話の発言の多義性と、理解の多様性を生み出すユーモアの修辞的機能との関連を念頭において考察を進めた。イ) ゲーテを取り巻

く最も深刻で根本的な文学事情は、荒廃を余儀なくされた母語の問題であったことを確認した。ウ) ゲーテが1813年頃から古典派とロマン派の和解を真剣に考えていたことを確認した。エ) ゲーテの覚書と4月の対話中の発言は、「詩人は表現を拠り所にする」と述べるゲーテの文章表現論の一端である可能性があることを指摘した。

さて最後に、ゲーテの1829年の覚書と4月2日の対話の発言があったと同じ1829年の暮の12月16日のゲーテの対話での「クラシックなものと同マンティックなもの」についての発言を、ゲーテ研究家の見解を参考にして振り返り、今回の考察を終えることとする。

先に第三章の「論証的考察 —その3—」で紹介したカール・オットー・コンラーディは、詳細で浩瀚なゲーテ研究書の『ゲーテ 生活と作品』の終わり近くの「老年の視野」の章の「時流の傍観者」の節で次のように述べる。

「人間の健全な天性が一つの全体として働いている」(『ヴィンケルマン』12,98) ことを望み、ギリシアの彫像が表わす人間の形姿に美の模範を見ようとする者は、ロマン主義の傾向を病的なものに見なさざるをえない。〔ロマン主義は、〕無限なもの、超越的なもの、幻想的なものなど、存在の夜の部分を求め、あげくの果てはグロテスクなもの、さらには個の存在を切り刻むような苦痛な自己分析にまで至る病癖である。『古典主義的なものは健康であり、ロマン主義的なものは病的だ』という、エッカーマンに対する例の発言(1829年4月2日)は、このような関連においてのみ理解することができるのである。⁷¹⁾

しかし、このコンラーディの考え方は、クラシックとロマンティックの

71) カール・オットー・コンラーディ著、三木正之・森良文・小松原千里・平野雅史訳『ゲーテ 生活と作品』(下巻)、南窓社、2012年、1154頁。

正しい理解の妨げになるばかりでなく、詩人、戯曲家、小説家としてのゲーテの労苦に満ちた創作活動の長い道のりの正当な評価の妨げになる。

それは、次の理由による。コンラーディは、ゲーテの古典主義の宣言書とも言われている芸術論文の『ヴィンケルマンとその世紀』（通称『ヴィンケルマン』1805年）の第二章「古代的なもの」の一節を引用して、1829年4月2日のゲーテの対話中の発言に言及している。ここでのキーワードは言うまでもなく、「健康な／丈夫な／健全な」（gesund）である。

コンラーディの引用文の「人間の健全な天性が一つの全体として働いている」は、ゲーテの次の文章からのものである。

「人間の健全な本性がひとつの全体として働き、人間がこの世界において偉大な、美しい、品位と価値ある全体のうちに置かれているのを感じ、調和のとれた快適さが彼に純粹でのびやかな喜びをもたらすならば、そのとき宇宙は、……（中略）……自己の生成と存在の頂点を賛美することであろう。」（『ヴィンケルマン』③159頁。FGA19-179）

この引用文は、ゲーテの古代的^{コスモロジー}宇宙論であると言えるものである。従って「人間の健全な天性が一つの全体として働いている」という副文の一節は、「古代的なもの」へのゲーテの憧憬のコスモロジーからの一節である。ゲーテが「入念かつ繊細」に言葉を選んで文章を書くことはよく知られている。第二章の「古代的なもの」（Antikes）で、ゲーテは「健康な／丈夫な／健全な」（gesund）という言葉を使用する。順に、「健全な天性／本性Natur」、「健全な人間の諸能力 Menschenkräfte」、「健康な筋／繊維 Faser」、「健全な感覚／センス Sinn」である。そして、全24章から成る『ヴィンケルマン』において、ゲーテが「健康な／丈夫な／健全な」（gesund）という言葉を使用するのは、この「古代的なもの」（Antikes）の章においての、4回のみである。ゲーテは「健康な／丈夫な／健全な」

(gesund) の語を古代的宇宙論^{コスモロジー}に固有の言葉として限定的に使用するのがある。例えば「美」の章、「文芸」、「性格」の章では、ゲーテは「健康な／丈夫な／健全な」(gesund) の語を一度も使用していないのである。

コンラーディは、1829年の対話での例の発言は、ゲーテが1805年のギリシアの古代的宇宙観を想起して、突然発した言葉であると主張する。コンラーディは、ゲーテの古典主義への絶対的回帰を読者に強く印象づけようとしているのである。しかし、そのように古典主義の一方面的な賛美と崇拝を79歳のゲーテのうちに認めることは、むしろゲーテの実人生と創作活動からあまりにもかけ離れている。

ゲーテには、1805年から1829年までの間に、重大な変化があった。「ゲーテの一面的な古典主義からの脱却を告げるものとして有名な詩がある」⁷²。こう前置きして、エルンスト・ヴィンセントは次のゲーテの1814年と1815年のいずれも夏から秋にかけて歌った詩集『西東詩集』^{ディーヴァン}の中からの詩「歌と形象」(Lied und Gebilde, FGA3/1-531,568) を上げる。

ギリシア人が粘土をこねて
様々の形姿をつくり、
自分の手から生まれた子供に
どれほど歓びを高めようと、

私たちの豊かな歓びは、
ユーフラテスに身を浸し、
水の流れのままに
泳ぎまわることだ。

こうして私が魂の焰を消すと

72 エルンスト・ヴィンセント著・桑嶋健一訳『情熱と分別 ゲーテの生涯を飾る女性群』泰尚社、1946年、87頁。

歌がひびき出すのだ。

詩人の清らかな手がすくえば

水も珠をむすぶ⁷³。

またシュタイガーは、この詩歌を上げて次の様に述べている。「ゲーテは、すでにシラーの死以来ギリシア・ローマの模倣に疑問を感じていた。しかし、いまやゲーテは、いかに超然として無造作に古典主義の芸術に訣別していくのである」⁷⁴。更に述べるならば、この詩歌は1814年から1815年の『西東詩集』(FGA3/1-531,568)、1819年の『西東詩集』(FGA3/1-21)、それと1819年から1827年の『西東詩集』(FGA3/1-313)においてと、4回歌われる。ゲーテは、1813年執筆、1815年発表の評論『限りのないシェークスピア』で初めて明らかにした創作活動の新境地が健在であり続けることを表明するかのように、「歌と形象」を繰り返し歌うのである。従って、コンラーディの主張は、ゲーテが1788年にイタリアから戻った後、1805年の「ヴィンケルマン」を経て更に大きく飛翔してゆく、1829年までの長い苦難の道のりをまったく考慮していないことになる。

対話での問題の発言のあった次の年に、ゲーテは5年ぶりに自伝『詩と真実 第四部』の執筆を再開する。その同じ年、春からイタリアで療養中の愛息アウグストの晩秋のローマでの客死の報を受ける。「ゲーテの精神はもっとも激しい試練にさらされた。⁷⁵」しかし、ゲーテは深い哀惜の中で、その翌年の1831年に、『ファウスト』の「第二部第四幕」に取りかかっている。それは1829年12月16日の対話での「クラックなものと同ロマンティックなもの」、この「二つの文学形式」によって『ファウスト』の「第二部」「第二、三幕」が生まれた、その確信に基づく、「第四幕」の着手である。ゲーテ

73 平野雅史訳「歌と形象」、シュタイガー『ゲーテ 下』13頁。詩情豊かな桑嶋健一訳がある。しかし、文語体訳であり、ユーフラテスの正書法(表記法)もそうであるので、平野雅史訳を採用させて頂く。

74 シュタイガー『ゲーテ 下』13頁。

75 アルベルト・ビルショフスキ『ゲーテ その生涯と作品』1107頁。

のこの強靱な精神からして、ゲーテの意識が突然回顧的に1829年から1805年へと、更には1788年のイタリア帰り後の古典主義礼讃の時代へと回帰するとは、とても考えられないことなのである。

この論文の書き出しの「はじめに」で、問題の覚書と対話での発言があった同じ年の暮の12月16日の対話で、ゲーテがことのほか上機嫌に、『ファウスト』の第二部の「第二幕」と「第三幕」の出来栄を自ら^{ことほ}寿ぐ姿に触れた。そのことをここで改めて取り上げる。

ゲーテは聞き手のエッカーマンに向かって次のように語る。

「君は、すでに前の方の幕〔第二幕〕においても、クラシックなものとロマンティックなものが、たえず鳴り響いたり、語られたりしているのに気づいていただろうが、それというのも、坂道をのぼるみたいに、〔第三幕の〕ヘレーナのところにまで登って行って、そこでこの二つの文学形式がはっきりとあらわれて、いわば和解に達するようになったわけだよ。」更にゲーテは続ける。

「クラシックなものもロマンティックなものも」「どちらも同様に、結構なものだ。大切な点はこの形式を理性的に利用して、その中で傑出したものをつくりうるかどうかということだ。」

我々がここで注目すべきことは、「クラシックなもの」とロマンティックなもの」の「二つの文学形式」が一体となった時、『ファウスト』の創作中でゲーテが最も困難をきわめた第三幕の「ヘレーナ」が初めて完成したということである。それが力となって、最晩年の苦境のゲーテが、『ファウスト』の第四幕を書き始める。そして1831年の不朽の名作『ファウスト』第二部全五幕の完結をみるのである。ゲーテは歌う、「現在 おまえこそ太陽！ 現在 そこにこそ生命があり、永遠がある」⁷⁶。ゲーテの現在は

76 山口四郎訳「現時」(Gegenwart,1812) ①36頁, FGA2-40)

過去へと回帰しない。「クラシックなもの」と「ロマンティックなもの」の調和と協働によって、ゲーテの現在は未来へと向かうのである。「クラシックなもの」と「ロマンティックなもの」、この「二つの文学形式」は、詩人としての使命を全うすることを義務とするゲーテの「力強い精神⁷⁷」を根底から支えるのである。

おわりに

今まで繰り返し取り上げたように「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである」というゲーテの覚書があります。この言葉にエッカーマンの『ゲーテとの対話』のなかの4月2日のゲーテの発言が加わって、ある種の不可解で論争的な問題圏が作られることになりました。ゲーテの最晩年のこの不可解な言葉の意図するものがなんであるのか。このことを逐一論証的に解明することを試みました。その結果、ゲーテ研究者によって、「有名で、評判の悪いコメント」といわれているこの覚書と対話中の発言によって、ゲーテがクラシックやロマンティックの定義を意図したものではないことが明らかになったと考えます。

ゲーテはユーモアは理解の多様性をその本質とする、と述べます。我々は、ゲーテのこの考えにもとづいて、問題の言葉の多義性から、このコメントもまたゲーテの豊かな知性から生まれたユーモアの一つであると言う結論に達しました。論証的考察の過程で、高名な優れた研究者さえもが、ゲーテのこの多義性に富む覚書と発言によって、混乱を来していることが明らかになりました。それ故、問題の言葉が、クラシックやロマンティックの概念を一義的に規定する意図をもつものとは、到底考えられないことが、一層明白になりました。また、詩の源泉であるロマンティックな詩人の心を、まるで病的なものであるかのように言う詩人ゲーテの言葉に、ゲーテの逆説的なイロニーを読み取ることも出来ます。いずれにしても、ゲー

77 アルベルト・ビルショフスキ、同上書1107-1109頁参照。

テの遺稿の中であって、格言集におさめられた問題の「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである」という覚書は、ゲーテが何かの定義を意図したものではないことは、十分に明らかになったと考えたいと思います。

しかし、我々には更に新たな問題が次に残されたように、思います。その理由は、ゲーテその人の人柄にあります。ゲーテは、自らが自伝『詩と真実 一わが生涯より一』のなかで語るように、学問好きで教育熱心な父から努力と根気と反復の精神を受け継ぎました。性格が非常に真面目で几帳面な人柄であるゲーテは、ただ単に詩歌を作り、戯曲や小説を書くことで満足することなく、詩人の使命が何であるかを深く自覚しておりました。詩人は表現を抛り所にする。そうゲーテは述べます。表現を抛り所にする詩人は、そのことによって、言葉を彫琢し、言語を耕し、母語を豊かなにします。これが詩人にもみ許された特権的使命であることを、ゲーテは誰よりも深く自覚する詩人であります。生きる^{よろこ}喜びと物語を語り^{メルヘン}周りの者を楽しませる才能を母から与えられたゲーテが、あの問題の覚書に託したのは何か。我々はもう一歩前に進むよう、求められているように思われます。

この度の論文の発端は、今年の後期の授業にあります。日頃、カントを基本にして西洋近代哲学を中心に講義をしてきましたが、たまたまドイツ・初期ロマン派の人びとについて講義をする機会に恵まれました。その際、当然のことのように「クラシックは健康的なものであり、ロマンティックは病的なものである」というゲーテの問題の覚書に言及しました。理由は、ゲーテの問題の言葉をクラシックやロマンティックに対するゲーテの定義であると、過大に評価する傾向があるからです。ドイツ・初期ロマン派についての講義は、病的な人々についての話であるというのでは、話をする者も話を聴く者も興ざめです。また、国際的な文学研究の分野の一つに、ロマン主義 (German romanticism) という分野があります。異文化理解と異文化コミュニケーションの観点からも、是非一言触れておく義務を

感じました。そして何よりも、ゲーテが自伝のなかで自ら語るように、青春はロマンティックそのものです。従って、青春真っ只中の学生たちに、ゲーテの問題の言葉は定義でも何でもありません、と明言することは、非常に大切なことであると考えたからです。ロマンティックが病的とは、ゲーテは考えていません。ゲーテのあの言葉は、クラシックやロマンティックの定義ではありません。講義はこのような前置きで始まりました。しかし、事柄はそれですっきり決着するような性質のものではありません。それで時間的な制約上、この件についての補足資料の配布の約束をしました。1時間程度で通読出来る、A4で10枚程度のもとも告げました。しかし、何時の間にか、このような長いものになっていました。その理由の一つは、『ファウスト』を訳した柴田翔の、ゲーテは「名のみ高くて、読まれることの少ない作家」であるという一言があります。ゲーテのことを知らないで、ゲーテの言葉だけを概念的に説明されても、学生たちにとっては言葉遊びの何物でもないと言うことになりかねません。それだけは何としても避けたかったことです。そのために本題に入る前に、ゲーテの紹介をすることにしました。

本題に入ってから次は次のようです。問題の言葉の翻訳史から明らかのように、ゲーテの覚書と対話中の発言の密接な関係からして、問題の言葉の意味は二通りに取ることが出来ます。話は必然的にそこから始めることになりました。出来るだけ読んで貰えるようにと、コンパクトに節目節目でまとめるようにして、ワンポイント・レッスンの積み重ねのようなものを考えてもみました。しかしそれでは、説得的になり、解明的なものにはなりませんでした。説得的であることを戒めるカントにならって、自ずと説明的に、解明的に考察を進めることにしました。前に戻って読み返す必要のないように、大切な箇所は繰り返し引用しました。重複感の煩わしさは、私の力不足のせいです。

ゲーテはもとよりドイツ文学の研究の門外漢がこのような長い論文を発表するのには、少なからず気後れるものがあります。しかし論文がこの

ように長いものになったのは、『限りのないシェークスピア』というゲーテの評論からも明らかなように、ゲーテの限りのない偉大さのためです。拙い論文を読んで下さった方々のご理解を乞う処であります。

(本学名誉教授)